

---

# 「幼なじみ」

ぴよこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「幼なじみ」

### 【Zマーク】

Z3881-Z

### 【作者名】

ぴよこ

### 【あらすじ】

「…逃げてみるか？」

肩越しに見える天井の色と、色素の薄い髪の色がやけに美しいコントラストを描く。見慣れた彼の部屋、…ベッドの上。そう言って、綺麗な顔が笑つた。

「幼なじみ」の紗衣<sup>さえ</sup>と対<sup>つ</sup>斗<sup>と</sup>。ある夜をきっかけに、ふたりの関係は変化していく。このまますっと、傍にいられる…？

## 20・1（前書き）

初投稿です。

ベツタベタの王道ストーリー。

行き当たりばつたり。8割方話は書けていますが、最初のプロットと全く違う展開になつたりして、ビックリですw

少しづつでも、なるべく期間を開けずに投稿していきたいと思います。1-2月中には完結させたいです。  
よろしくお願ひします。

「…逃げてみるか？」

肩越しに見える天井の色と、  
色素の薄い髪の色がやけに美しくコントラストを描く。

見慣れた彼の部屋、  
…ベッドの上。

そう言って、

綺麗な顔が笑つた。

\* \* \* \* \*

私達は、お互い出会いの頃を覚えていない。  
そんな事は、思い出せないくらいずっと昔の記憶なのだ。

産まれた時からいつも一緒に。

私にも宥斗にも兄がいるが、年が離れているため、小さい頃は常に宥斗と行動を共にしていた。

私が母のお腹にいるころに新築で家を建て、先にこの家に住んでいたところ、2ヶ月あけて隣に越してきたのが宥斗達家族だった。

上の兄同士も同じ年、下のお腹の赤ちゃんも同じ年、しかも予定日まで同じ、とくれば、母親達はすぐに意気投合したようだ。

現に、今でも大の仲良しでショウジョウ父兄たちを置いてショッピングだの、旅行だの、ふたりで出かけ回っている。

お互い両親が共働きなので、私が高校生になった頃、両家の夕食の準備を買って出た。

最初は「大変だらうから、やらなくていいよ」と諭されていたが、始めたことはなかなか辞められない性分なのを両親ともによく分かっていて、今では毎日の口課となっている。

母親の仕事が終わるのが早い日や、休みの日などは赤ちゃんと作ってくれるし、品数は一緒なのだから量が多いだけで、食事の準備は全く苦じじゃない。

料理は小さい頃から大好きだ。

それを夕飯になると宥斗の家に届けに行く。

兄たちはほとんど家を出て自活しているので、ふたりで夕飯を食べ

る。

宥斗が後片付けをしてくれて、後はテレビを見たり、宥斗の部屋でゲームをしたりして一緒に過ごす。

進路も決まった高校3年の冬、バイトも部活もしていない私たちは、お互い友達との予定がない限り、夜はふたりで過ごしていた。

いつもと同じ、夜のはずだった。

「紗衣…ちゃんとタイミング合わせよう…」

「あ、合わせてるよ…あれ…？」

その日の夜は、このところハマっているゲームをしていた。

ふたりで協力しながら先に進んでいかなきゃいけない、迷路のゲーム。

対戦ものだと宥斗のひとり勝ちになつてしまらない、と言つたら宥斗が買つてくれたゲームだった。

「あ～～…！」

私が叫び声をあげて、ゲームオーバー。

「やっぱ紗衣には難しかったか…。もつと簡単なやつじゃねえとダメだな」

「まだ慣れてないだけだもん…！」

ムキになつて言い返せば、宥斗は優しく笑う。

ドキンッ

顔が赤くなる前に、急いで言葉を紡ぐ。

「 もう一回ー。」

「 おーし。早く慣れるよなー」

最近の宥斗はこんな風に優しく微笑むことが多いなくなった。

思春期特有の、仲がいいとかわれる、なんて時期ももう過ぎた。今では学校中の人が、私達の関係を知っている。

ふたりでいると、付き合っているのかと質問されるとかよくあつたけれど、私達はいつも同じ返答をしていた。

「 幼なじみ」だと。

宥斗は中性的な顔立ちをしていて、手足がものすごく長い。

身体のバランスがいいからか、175センチくらいしかないはずの身長はむしろ高く見える。

小さい頃から綺麗な顔をしていたけど、高校生になった頃から男らしさも加わって、女の子に声を掛けられることも増えた。

けれど、女の子に対する愛想をお母さんのお腹の中に起き忘れてきてしまったのか、応対がそつくなくて、それがまた競争率をあげる原因となっているらしい。

毎日登下校を共にしてくる私も、入学当初、嫌がらせを受けたこと

もあつたけれど、友達と宥斗が一喝してくれて、それ以来あからさまな攻撃は受けていない。

でも、「幼なじみ」だから、隣にいることを許されたような気がして、なんだか変な気分だった。

その時、自分は宥斗のことが好きなんだと気付いた。

「幼なじみ」じゃなくて、「彼女」として宥斗の隣にいたい。

宥斗にも、私のことを「女」として見て欲しい。

友達には告白するより出すすめられるけど、失敗して、「幼なじみ」としてすら宥斗といられなくなるのはイヤで、なかなか踏み出せない。

この関係を崩すのが怖い。

でも、やっぱり好き。

宥斗の優しい笑顔を見るたびに、たまらなく胸が苦しくなる。

\* \* \* \* \*

「うわ、もうゲームはじめて2時間もたつよ

「あー喉乾いたなあ。紗衣も何か飲む?」

「飲むー」

なんか持つてくる、と宥斗が部屋を出て行く。

時刻は午後10時。

そろそろ帰らう、と思いながらゲームを片付けていると宥斗が戻つてくる。

「早くない?」

「俺、紗衣と違つて足長いから」

笑いながら片足を上げて、足首をひらひらさせながら言つ。

〔冗談だらうけど、事実なのがムカつく。〕

「いただきまーす」

「無視かよ」

ベッドに座つて、宥斗の持ってきた缶ジュークスを飲む。

甘い。

ジュークスを飲み始めた私を見て、ベッドの横にある勉強机の椅子に宥斗も座る。

「あ」

「なんだよ」

「やういえば、みのりがね、日曜日に、みのりの彼氏と、その友達と、あと女の子何人かでカラオケに行くらしいんだけど。今日誘われたんだ」

「ふーん…」

机に頬ずえをついて、宥斗がこちらを見る。

ん？ 機嫌悪い？

「で？」

「え？」

「行くの？」

あからさまに、イヤそうな声。

何年一緒にいても、宥斗の怒った顔は怖い。

怒っている理由がわからないので、そのぶん余計に怖く感じた。

「うーん、まだ決めてないけど、みのりがもし参加するなら、宥斗の許可とってもからにしろって言つから」

内心怯えているのを、極力顔にださないように心掛けて答える。

親友であるみのりに誘われた時、「絶対に宥斗の許可を取るよう」

と念をあされた。

別に男の子とふたりだけで出かけるわけでもないし、付き合っているわけじゃないんだから、聞く必要もないと思つたが、みのりにしつこく言われたので、一応話してみた。

… 言わなきゃよかつたかな。

「それ合コンだろ？」

言つて、持っていたジースを飲み干す。それから乱暴に左耳を搔いた。

ああ、イライラしてゐる。

宥斗はイライラすると耳に触る癖がある。

… て

え！？

「えー？ 合コンなのー？」

あまりにもびっくりして、持っていたジースを落としちやうになつた。

危ない、危ない。

「顔も知らない男と女が何人かずつで集まつたら、そりや立派な合コンだろ」

呆れたような声で言られてから、その法則はいかがなものかと思つたが、黙つておく。

「あ～なるほど～…。」

「なんで氣づかねえんだよ。紗衣はホントにアホだな」

「アホって！…だってみのり、合コンなんて言わなかつたもん…！…だいたい宥斗だつて、女の子交えて出かけたことくらいあるでしょう！？」

話してて、自分でもよくわけがわからなくなつってきた。

なんでこんなことで言い合つてしまつたんだ。

でも、宥斗だつて女の子を交えた大人数で出かけてるのに、なんで自分だけアホ呼ばわりされなきやいけないの。

それだつて、宥斗の言う法則で言つたら合コンじゃない…！…

「俺のは合コンじゃないだろ。最初からわかつてたら行かないし。まあ明らかそれっぽくなつた時は、さつさと帰つてくる」

宥斗が飲み終えたジュースをゴミ箱に投げる。

ナイッショー

つて違う…………

「私だけ、明らかそれっぽくなつたらさすがにわかるもん!」  
「いやいや。紗衣は誘われてるのにも戻付かないまま付いていくだ  
る」

「……うーもしやつなつても、わざわざと帰つてくれればいいんでしょー。  
?」

もつ売り言葉に買い言葉だ。

私はベッドにある枕を、宥斗めがけて投げつける。

「… できんの?」

つまごこと両手で枕を受け止めた宥斗が、近年稀に見る怖い顔でつ  
ぶやく。

馬鹿にして……！

「できるよーー！」

瞬間、宥斗が勢いよく椅子から立ち上がる。

え、と思つてこむヒマもなく、両手首を掴まれると、視界が突然動  
いた。  
ベッドに背をつづくと、ぽふつと、なんとも間抜けな効果音が響き渡  
る。

そのままベッドに縫い付けるように手首に力をこめられた。

気が付くと、宥斗の肩こりに天井を見上げていた。

「紗衣」

私を呼ぶ、声がする。

こんな風に、宥斗に呼ばれたことなんてない。

握られている手首が、かすかに痛む。

「…逃げてみるか？」

真っ直ぐ私を見下ろす宥斗が不適に笑った。

一瞬のうちに、自分の顔が真っ赤に染まっていくのがわかった。

田も、こんなに見開いたの初めてじゃないだろうか。

この田は私の田で、これは私に起じた現実の出来事なのに、まるで映画をみているような不思議な感覚だった。

何も言えずに固まっていると、ふと、いつもの優しい笑みを浮かべた顔がどんどん近付いてくる。

まばたきさえも忘れた私は、人形のように固まつてその様子を見ていた。

唇が触れ合うつかと思つぽどに近付いて、宥斗は一度動き止める。

ああ、やつぱり宥斗は、なんて綺麗な顔をしているんだね。

なんて、その場で考へるにふさわしくない事を考へてから、はつと  
我にかかる。

え！？

お、おおおお押し倒されてぬう～～～！？

声にならない驚きで口をパクパクさせると、それを見ていた宥斗が吹き出した。

「ぶはつ」

そのまま顔を私の右側によけて、宥斗もベッドに倒れこむ。

手はまだ、掴まれたままだった。

しにぐく笑つて氣が済んだのか  
手かほとかれ向あくのいよに体  
を引っ張られる。

「ロソヒと転がると、綺麗な顔が田の前にあつて、驚いて体を離そうとするが、今度は宥斗の右手に肩を引き寄せられて、すっぽりと覆われる。

近い！近い！

状況についていけないアワアワした私を見て、もう一度微笑むと、

そのあと、切なく顔をしかめて言った。

「俺の、田の畠く範囲こいてくれよ…」

そのまま頭を下げる私の視界はふさがれる。

「うん…」

それ以外の答えを、私は持ひ合わせていなかつた。

田曜日。

昨日の夜はなかなか眠れなかつたのに、もう田が覚めてしまつた。まだ空の色が薄暗いことから平日の起床時間よりも、まるかに早いことがわかる。

「まだ5時半か…」

ベッドの枕元にある田覚まし時計を見て感く。

あのあと、じりやつて自分の家に帰つてきたか、覚えていない。

気が付いたら自分の部屋について、ベッドの上だつた。

何度も何度も、あの時の、切なく微笑む宥斗の顔が脳内を巡る。

それだけでまた顔が真つ赤に染まつていくのがわかつて、キツく目を閉じた。

まだお風呂に入つていないし、みのりに断りの電話もいれていない。両親は出張で月曜日の夜まで帰らないそうなので、ダイニングに出しつぱなしの料理も冷蔵庫にしまわなくちゃいけない。

わかっているのに、宥斗のことを考えると、その他全ての思考が停止してしまつ。

田の西く範囲にひらひら、びりこつ意味?

それは「幼なじみ」として?

それとも…?

意識を覚醒させてくれたのは、他でもない、宥斗からの電話だった。

『もしもし』

「も、もしもし…ッ」

『悪い、寝てた?』

「え?」

慌てて目覚まし時計を振り返ると、時刻は午前1時。

何時間ボーッとしたんだわたしは…！

『また明日かけるわ

「宥斗！寝てない！…起きてたっ！」

電話を切らうとする宥斗に慌てて口を挟む。

『やうか』

「うふ…」

妙な沈黙やめてよー！

もひ、心臓の様子がおかしい…！  
ありえない早さで打つてる…！

『紗衣、田曜田は、今コソ行かない？』

「行かな…よー…」

行くなと言つたのは自分なのこ、なんでそんなこと聞くんだひ。携帯をもつ手に力がこもる。

『じやあ…わ。映画見に行かねえ？』

「映画？」

『うふ。この前テレビでこやつてたやつ。お前、見たいって言ってただろ？』

「ああ…よく覚えてるね」

『紗衣と違つて、頭もいいもので』

笑いながら言ひ、こつもと同じ調子の宥めにまつとす。

気まずくなるのは、イヤだったから。

「はーはー」

『ははっ。でも、日曜日から公開なんだと。だから…』

「行く…。」

『即答かよ』

嬉しそうな声を聞いて、胸が千切れそつた程にキュンつとなつた。

びひこひ。

宥斗が好きだ。大好きだ。

もう何年も前に気づいたことを、改めて確認する。

まだ「幼なじみ」でもいい。

傍に、いたい。

『じゃあ日曜日。遅くにいのん』

「うん！わかった

『じゃあ日曜日。遅くにいのん』

「うん、おやすみ」

電話を切つてから、久しぶりの寝斗との外出へのワクワク感でなか  
なか眠れなかつた。

そのままのテンションで過いした土曜日はすさまじかつた。  
着ていく洋服を選んだり、髪型を決めたり、久々にマニキュアを塗  
つてみたりした。

自分の浮かれっぷりに途中で気付いたけど、楽しみなものは楽しみ  
だから仕方ない。

そして、今日もひりしてとんでもなく早くから起きてこる。

もつ寝れないし…洗濯して掃除しちゃおう。

今日はいい一日となるところかな。

そつ思いながら、ベッドから抜け出した。

## No.5(前書き)

今さらながら、行間が開きすぎて読みづらいですね。。。次回小説を書く時は、もつと詰めて書くことになります。

玄関に備えついている、大きな鏡を前に、お出掛け前の最終チェックをする。

チェックのプリーツミニスカートに、白ニショートコート。足元は茶色の二ーハイブーツ。

いつもは下ろしてる髪の毛も、ハーフアップにして、毛先だけ「コテで巻いた。

メイクは学校にも薄くしていいいるが、今日はアイシャドウをキラキラ輝くラメの入ったものにして、初めてつけまつげを付けてみた。

つけまつげには苦手意識があつたけど、みのりに教えてもらつたこのまつげはとても自然で、よつよど近付いて見ないと、つけまつげと分からない。

マスカラを塗るより時間がかかるないし、濃くないのに目が大きく見える。

服装も、髪も、メイクもつまくじつた。

それだけで、なんだかすく嬉しくなる。

この自己満足感は、女子特有のものだらうなあ……。

携帯で時計を確認すれば、時刻は10時50分。待ち合わせの10分前だった。

「こつてせまーす」

誰もいない我が家に挨拶をして、玄関の扉を開ける。

そのまま門の外まで出てみると、宥斗はまだ来ていなかつた。

ドキドキする心臓を落ち着かせるために、ひとつ深呼吸をすると、吐息が白く変わつた。

12月も半ば、寒さが身にしみる季節になつてきた。

平日は基本的にいつも一緒にいるのに、あの夜のこともあつたせいか、待ち合わせ（家の前だけ）して出掛けるとこいつと異常に緊張する。

あの夜からまだ2日。

2日間、ひたすらぐるぐる宥斗のことばかりを考えていた。

私を束縛するかのような、宥斗の言葉が嬉しかつた。

それが、「幼なじみ」としてなのか、違う何かなのかはわからない。

だんだん冷静になつた頭で考えれば、心配性な宥斗の事だ。

ベッドに押し倒したのだって、意地っ張りな私への、ある意味「警告」のようなものだったのかもしれない。

だけど、言葉の意味も行動の意味も、どうでも良くなる程に、嬉しかったのだ。

「女」としてじゃないかもしないけど、田の届く範囲にいると言われた。求められたその事実が、悲しいかな、私の恋心を刺激する。告白して、振られて、傍にいられなくなるくらいなら。「幼なじみ」でもいい。

永遠に失うつもりはずっとここ。

携帯でもう一度時間を確認すると、11時を過ぎたところだった。

そろそろ来るかな、と、宥斗の方に田線を向ければ、ちょうど玄関から宥斗が出てくるところだった。

門の外まで出てきて私を見つかると、ギュウッと顔を寄せ、少し離れた距離でそのまま立ち止まっている。

何やつてるんだか？…。

「宥斗？」

小走りで近寄ると、視線をチラッと私の顔に向けてから、足元へとうつした。

「紗衣、まさかその格好で合コン行くつもりだった？」

「え？…変かな？」

みのり達と出掛けることを決めていたわけではないので、もちろん答えはNOだけど、まさか今日のために一人ファッションショーを催したこととは知られたくない。

変だつたかなあ…。

少し落ち込みながら宥斗を見上げれば、寄せられた眉はまだ戻つていなかつた。

「スカート、短すぎるだろ」

言いながら、チェックのミニスカートを引っ張つられる。

「ちよつとーーめぐらないでよーーー！」

慌ててスカートを手で抑えると、宥斗が手を離す。

「そんな短いので行つたら、男共のやる気に火がつくだけだろうが。

」

いやいやいやいや。

だからこの間からその勝手極まりない法則はなんなんですか。といふが、あなたのやる気には火はつきませんか。

スカートめぐりつて小学生か！

やっぱり女としてなんか見てないでしょ！

心の中でツッコミをいれて、最後の一文に自分でがっくつする。

私の判断は正しこと、再度思い知らされた。

「制服のスカートとそんなに変わらないでしょー。」

「制服より短いだろ。お前見てくれだけはそれなりにいいんだから、自覚しろよな」

「誰も私のことなんか見てないもん……だけって何よだけって！」

「中身伴つてないからな」

「宥斗……」

「中身伴つてないからな」

「2回言つなあ……」

はあはあ……つ。

出だしからこれ！？先が思いやられるわ！？

がなりすぎて息切れしてる自分に疲れながらも、このやりとつすら楽しい。

ふと田線を上げると、私と同じく楽しかったらしい、笑顔の宥斗の姿が目にいる。

黒いライダースジャケットに同じ色のマフラーを巻いて、デニムにショートブーツを履いている。

デニムはよく見るとケミカルウォッシュだ。

無駄に長い足が引き立つ。

「行くか

「…うん」

宥斗が歩きだす。

指摘された途端に気になってきたスカートの裾を押さえながら、私  
もそれに続いた。

映画の上映は2時からなので、その前にどこかでお昼ご飯を食べよう、という話になつた。

私達の家から駅まで徒歩15分。

駅前にも小さな映画館があるけど、最近5つ程離れた駅に新しい映画館ができたらしい。

まだ行ったこともないどころか、その存在すら知らなかつた私が驚いていると、せっかくだからそつちに行つてみるかと宥斗が言うので、電車に乗つて移動する。

宥斗は既に、友達と何度か行つたことがあるらしい。

私がいつも友達と出掛けるのは、たいてい反対方面なので、その駅に行くのは久しぶりだった。

駅から直結した巨大なショッピングモール。洋服や雑貨のショッピングモールの立ち並ぶ中にその映画館はあつた。

先にチケットを買つたために、映画館に入つてまた驚いた。まるで遊園地のアトラクションのような館内。チケットも、券売機で買えるといつ。

売り場に並んで、店員さんからチケットを受け取る、といつ従来の方法しか知らない私には衝撃だった。座席が自分で選べるのも便利だ。

作品名書いつのつてなかなか恥ずかしいもんねえ…。

「あ～もひつかひ埋まつてんなあ」

宥斗が券売機の画面をタッチしながら操作する。

私達が見たい映画は、今日封切りとだけあって、見やすい席は既に埋まっていた。

「おつーーー開いてるじゃん。けつこう後ろだけど紗衣、いい?」

「どこでもいいけど…ん?この席カツブルシートって書いてあるよ。これ何?」

「間の手すりがない席のこと」

「實に」ざつくりした説明ありがとウ…」

「ふたつの席が繋がつてて…なんかソファーミたいになつてんだよ」

「へ～…。いいよ。見れるならどうせでも

「ひとつと、宥斗はまた画面を操作して、お金を入れる。

「こべりへ。」

「いいよ。お前はそのままつた金でもつと丈の長いスカートを買え

「なにそれ…合コンなんて行かないもん!…」

「（口）ンじやなくても短かずあるだろ」

「はあ…。いつからそんなおとみみたいな事言つよつこなつたわけ  
？」

「よし。飯食いに行くか

私の質問を華麗に無視すると、ふたり分のチケットを財布にしまつて、さつさとホールームに向かつて歩き始める。

「無視はよくなことよ、宥斗くん

わざといひじへ言つて、後ろからマフラーを引つ張つてやつた。

「ぐえ

「あははっ。カエルみたい

「はあ…。紗衣はいくつになつてもやること変わらねえな

「宥斗は一気に老けたみたいね。おとんだし」

クスクス笑うと、宥斗が嫌そうな顔をしてから手で顔を覆つ。

「おとん言つな！そんなに短いの履いているところ初めて見たから  
驚いたんだよ」

「家でこの格好はしないでしょ」

「まあな

土日に宥斗と会うことはあんまりない。食事も両親がいるので届けなくていいし、お互い友達との予定もある。何もなくてもわざわざ家に行くことはほとんどなかつた。

たまに両親で食事に出掛けれるくらいだ。

中学生の頃はよく一緒に出掛けたけど、高校に入つてからは一度もないかもしけない。

余所行きの格好で会うのは、考えてみれば久しぶりだった。

お昼時なので、フードコートはほとんどのお店も人でごった返している。少し並んでから、パスタのおいしそうなお店に入った。

注文をして、メニューを閉じる。

「気にしてるようだから言ひておくけどね、このスカート自分で買つたんじゃないからね」

「…誰に買つてもうつたんだよ」

水を飲みながら、低い声で宥斗が呟く。

手の甲にめっちゃ筋たつてゐる…  
割れるつてば…！」

あまり現実味のない心配をしながら慌てて、一件の人の名前を呟く。

「みのり」

「ああ、早坂か…」

早坂みのりとは、例の合コンに誘つてくれた私の親友だ。

高校に入つて最初にできた友達。サバサバしたみのりとは、何年も前から知り合つていたかのように馬があう。

だいぶ前にふたりで買い物に出掛けた時。パンツスタイルの多い私に、「足を出せ!!」と、このスカート以外にも、デニムのショートパンツやらフリフリのシフォンスカートを無理やり誕生日プレゼントとして買つてくれたのだ。

一人ファッションショーでクロゼットをあさつていたら、そのときもらつたものの、一度も着てなかつたこのスカートが出てきた。

久しぶりの寝斗とのお出掛けに浮かれていた私は、たまにはかわいらしい格好もしたくなつて、このスカートに白羽の矢をたてたのだった。

「寝斗、そういうの気にするタイプだっけ?」

中学生の頃は今日程じゃないけど、短いスカートも履いても、何も言わぬかった気がする。

「紗衣のは氣になる」

その発言は私も微妙に気になる。

「…………。」

「どう切り返すが迷つてゐると、宥斗が先に口を開く。

「パンツ覗かれても気づかんそつだろ、お前」

「パンツとか言つなあ！――」

「この前から何を言つて出すんだ――！」

「さつきも言つたけど、もっと周りの田を自覚をしきつて」と。や  
んなんだから年下なんかに告白されんだよ」

いや、それは年下の方に失礼です。

と、いうか。

「なんで知つてるの――？」

「早坂」

「みいのつ――！――」

「紗衣はモテモテだな」

「モ――！――宥斗に言われたくない――！」

「俺のは無駄モテだ」

え、モテるのに、無駄とか無駄じやないとあるの？

「…最近は大丈夫か？」

「なにが」

「嫌がらせとか、さ」

言ひにくそうに田を呑わざず、宥斗が聞く。

ああ、まだ氣にしたんだ…。

「大丈夫だよ。みのりと宥斗のおかげで、あれ以来平和」

「そつか」

ほつとしたように、優しく微笑む。

私はその顔に死ぬほど弱い。

照れをこまかすように、卑口で告げる。

「あの時だつて別に大したことされてないもん。気にしそうだよ」

瞬間、宥斗の顔色が変わる。

自分の失言に気づいたけど、もつぢうじょうもなかつた。

下を向いて、何かに耐えるように宥斗がテーブルの上で拳を握る。

「お前…つ、どれだけ心配したと思つてんだよー」

突然声を荒げた宥斗にびっくりする。

そこへちょうど、先ほど注文した料理が運ばれてきた。

タイミングが悪い。

宥斗は魚介のクリームソースパスタ。  
私は和風ボンゴレだ。

「いや、悪い。俺が言えたことじやねえな

店員さんがいなくなつてから、宥斗が呟く。

「ううん…」

「…宥斗、そんなに気にしてたんだ。  
でもそんなの宥斗のせいじゃないのこ。」

「なんかされたら、ちゃんと俺に言えよ」

「大丈夫だよ。もうすぐ卒業だしね」

「…たまには頼つてくれよ、俺のこと」

寂しそうに黙つてから、パスタに口をつける。

食べ始めた宥斗を眺めながら、私は考えていた。

いつだつて頼りにしてる。

嫌がらせなんて、宿斗の傍にいられる幸せに比べたら、全然大したことじやない。

：だけどそんなこと言えない。そんなの、好きだと黙つてるようなものじやないか。

「頼りに…してるよ」

心に浮かんだ大部分の言葉は、パスタと一緒に飲み込んだ。

もつそのことには触れず、宥斗は私が残したパスタまですっかり平らげた。

おいしかったけど、なにせ量が多くて食べ切れなかつた。食事を終えると、上映時間も近くなつてきたので、映画館に向かう。

ご飯のお金くらいは自分で出したかつたのに、「今日は俺が誘つて付き合つてもらつてるから」と、口元でも宥斗はお金を受け止つてくれなかつた。

私の見たい映画を見に行くのに、付き合つも何もないのになあ。まあそれなら今度はどこかに私から誘つて、その時に払わせてもらおう。

勝手に決定した次の約束に、ひとりで嬉しくなつた。

少し早めに着いた館内的人はまだまばらで、席には空席が目立つ。チケットの売れ行きからして、もうじばりくしたらこっぽいになるんだろう。

私達の席はスクリーンからだいぶ離れた後ろの方だったので、長い階段を登つてそこまで向かう。

「紗衣、こい」

チケットと照らし合わせながら席を探していると、宥斗の方が先に見つけたらしい。

声のする方に向かうと、飛び込んできた光景に目を覆いたくなつた。

「え…」「…？」

「やつ。座れば」

宥斗が先に席に着く。  
それを見て私も慌てて座ったが、どうにも居心地が悪くてたまらなかつた。

カッフルシートといふ名らしいその座席は、ソファーのようになつていて、狭い1人用の座席に座るより快適に映画を楽しめそうだつた。

…座席だけなら。

なぜ。

なぜ他のカッフルシートのみなさんは、人もまばらな中すでに満席状態なのか。

なぜ。

なぜみなさん揃つて、「ここ日本ですよ」と声をかけたくなるほどいちやいちやちゅつちゅしてこるのが。

ここで宥斗と映画を見ると…  
ある意味拷問だわ！－！

「…宥斗」

「なに」

隣の宥斗に声を掛ければ、涼しい顔をして携帯を操作している。

「カップルシートって、いつの席なの……？」

「は？ どういう意味？」

「み、みなさいちやいちゃされてますが

「まあ、するだらうな。カップルなんだから」

携帯から田線は外さずに、しつと答える宥斗をドツきたくなつた。  
何回か来たことあるんなら知つてたんでしょー！？

「…恥ずかしい…！」

心の底から声をあげると、まさにいちゃいちゃ真っ最中のみなさん  
から視線を頂いてしまつた。

慌てて顔を下げる。

「恥ずかしいのはお前だ、アホ」

「…………！」

「紗衣、携帯マナーにしどけよ」

まだ視線がこちらに向いてくるよつた気がして、顔を下に向けたま  
まカバンから携帯を取り出す。

大丈夫。大丈夫だ。映画がはじまるまでの辛抱、暗くなっちゃえば  
何も見えない！！

その後の十数分、私は耐えた。

隣や「後ろやからから」、「映画はじまつたら、ナーナーする?」とか、「ねえ、暗くなつたら、キスして?」とか、「好きだよ。お前が一番かわいい…」とか言ひ台詞が聞こえる度に、私が言われてるわけでもないのに、恥ずかしくて泣きたくなつた。

そして氣を紛らわすために、こちやつへみなさんで脳内で「シシコシ」を入れまくる。

「ナーナーする気なの…! 映画館に来たのなり、映画を見るの…」「やのキスの計画の立て方おかしいから…!」利用は計画的…。「一番で…! では」「一番や二番もこりゃしゃるんですか…?」

シシコシ疲れたことにやつと館内が暗くなつて、予告がはじまる。ほつとひと息つくと、隣から強い視線を感じた。

「…………」

見てる…! 寝斗がめつちやいひち見てる…! なに…! 予告始まつたんだから、スクワーンを見よつよ…!

「寝斗…! どひしたの?」

小声で訪ねると、じつちをガン見したままの寝斗がお尻をずらして距離を詰める。

「な…! …近い…! …」

思わず出でしまつた声はもうこえず、肩がぶつかる程近くなつた

宥斗から皿をそらす。

すると、太ももの上に置いてあつた手をむんずつ…と驚掴みにされた。

びっくりして重なつたふたつの手を凝視していると、耳に唇を寄せて、宥斗が囁く。

「…映画が始まつたら、ナニする?」

「…………！」

思い切り顔を振り上げて宥斗を見れば、ものすごい至近距離で、意地悪に、面白そうに笑っていた。

ほんっ…………

脳内で、何かがはじける。

私の脳みそだつたらドウシヨウ。

一気に顔が赤く染まり、目を合わせたまままた動けなくなつた。どうやら私は、予想外にびっくりすることがあると、行動を停止してしまつ帰来があるらしい。

どうでもいい新事実を発見したまま、暗くて良かつた、顔真つ赤通りこして真つ黒になつてるかもしね、と確認しようのない顔色を嘆く。

すると宥斗は、顔を離し、下を向いて肩を揺りしながら声を出さずに笑う。

そして、私の意識が覚醒する前にもう一撃。

「…紗衣、ホントかわいい」

優しく微笑んで最後の一言を放った宥斗は、顔をスクリーンに向ける。

私はと言えば、脳内大爆発、心臓破裂寸前、顔面（多分）真っ黒、生きているのが不思議なほどだった。

もう、なんのなの…つ…！

「冗談にしたって、キツすぎやしない…！」

恐らく私に恋愛感情など持ち合わせていないであろう宥斗からすれば、あの夜のこと、今のこと、警告や冗談のつもりなんだろう。しかしあつさりと宥斗を好きだと自覚している私にとっては、冗談じや済ませられない。笑えない。

優しく微笑んだ最後の一言も、「冗談なの？」

私以外の女の子にも、こんなことするの…？

思わず、重ねられた手を少しづらして、宥斗の親指を強く握る。大きな手。昔とは違う、男の人の手。

小さい頃は、どこに行く時も宥斗と手を繋いでいた。暖かくて、ふわふわしてて、宥斗と手を繋ぐのが大好きだった。いつの間に、こんなに大きくなつたんだろう。

するとそれに気づいた宥斗が再度顔をこじりて向けて、嬉しそうに

笑う。

一度手をほどくと、指を絡めて繋ぎ直す。恋人繋ぎだ。

あの頃と変わらない暖かさを懐かしく思いつつも、その何倍も、宥  
斗と手を繋いでいる事実が嬉しい。

だけど、私の心に葬り去ったはずの戸惑いが広がっていく。

なんで、こんなことするの……？  
わかんないよ……。

見たかったはずの映画のストーリーは、ほとんど頭の中に残らなか  
つた。

## 20・8（前書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

冒頭で8割話が書き終えていると書きましたが、なんと半分くらいから書き直しています。

理由は後半にきての紗衣ちゃんの暴走。キャラがびっくりするほど勝手に動きます（、 - - - ）

活動報告に、小話を書きましたので、興味ある方はご覧下さい。

ずっと映像は見ていたはずなのに、いつの間にかエンドロールが流れていった。

館内が明るくなり、人が出口に向かつて流れしていく。

上映自覚は2時間ちょっと。その間、手は繋がれたままだった。

「行くか」

宥斗は私を引っ張りあげて、手を離すと、そのまま出口に向かう。ほどかれた手を少し寂しく思つていると、段々自分の身勝手さに苛立ちが募ってきた。

手を繋がれた時は嬉しいけど宥斗わけわかんないとか思つてたくさんに、離れたら寂しいだなんて……！

恋とはそういう身勝手なものなのだろうけど、初めて体感する感情に戸惑う。

あの夜までは、こんな風に自分の感情に振り回されることなんてなかつた。好きだけど苦しい、という想いはいつも抱いていたが、苦しい部分はとても小さくて、概ね好きという感情は、とても暖かくて、それだけで胸がいっぱいになつたり、宥斗の傍にいられることを幸せに思うものだつた。

一人で勝手に喜んだり、落ち込んだり、あの夜から私の恋心は、目まぐるしく動くものになつた。

「せっかく來たし、どうか見て行くか」

映画館を出て、ショッピングモールの出口に向かって歩いていた宥斗が突然言った。

「え…」

「もう帰りたい？」

「ハハハん…」

満面の笑みで返す。

このまま帰るものだと思ってたので、素直に嬉しい。

進行方向を変えた後、スルリと手を繋がれる。またしても、恋人繋<sup>めぐら</sup>。

「嫌か…？」

少し頭を下げる心配そうな顔をした宥斗が訪ねる。

そんなの決まってる。

「嫌じゃ…ない」

宥斗が発する甘い空氣に耐えられなくなつて、そっぽを向きながら無愛想に答える。

でもきっと顔は赤くなつてしまつてゐるだらう。明るいところだと隠<sup>かく</sup>しそうがない。

私の返答に宥斗は嬉しそうに笑つてから、「じゃあ行くか」と歩みを進める。

「紗衣、どうか行きたいとこある?」

「うーん…お店ありますから見たらいいかもマイチわからんないぜ」

「なら俺行きたいところまだけど、ここ?」

「うふー!」

エスカレーターに乗つて、階を登る。

着いた先なは、男性物の洋服屋さんが立ち並んでいた。

「洋服見たいの?」

「ああ。この前来たときにお店に欲しごとーがあつたんだけど、色で悩んで決められなくてさ。面倒くさくなつてその時は買わなかつたんだけど」

「へえ…。なんでも即決の宥斗が珍しいね」

そのまま手を引かれて、宥斗のお店のホールのホールが並んでるお店に入る。

男性ブランドのお店に入るのは初めてで、ちょっとドキドキした。宥斗は迷いなくホールに辿り着くと、黒とカーキのホール指差した。

「これ

「N3Bかあ。似合ひそつだね」

「紗衣、どっちがいいと思つ?」

「えー? 私! ?」

「お前以外誰がいるんだよ」

「え~…」

思わぬ大役を仰せつかって、ドギマギする。だいぶ拳動不審だ。  
だいたい男の人の服選ぶのだって初めてだよー!!

今まで宥斗以外の男と出掛けたことなどない。必然的に、何をする  
にも異性では宥斗が初めてになる。

私が選ぶのを、宥斗はじつと待つていてる。

コートを交互に見比べ、何度も宥斗を見やる。

…ダメだ!! どっちも似合ひそつちやう…

惚れた欲目だろうか、まあ多分違うのだけど、黒もカーキも、宥  
斗によく似合ひそつだつた。

少しの時間悩んでから、宥斗に告げる。

「ダメだ!! 見ただけじゃわかんない!! 着てみてくれる?..

「嫌だ。見ただけで選べ」

「はあー！？」

なーんーでーーー？そんなに難しいお願ひですかコレーー選ばせるなら着てみせるくらいしてくれーー！

脳内ツツ「コリ」が聞こえたのだろうか。 審斗が顔を背けながら、ボソツと呟いた。

「…なんか恥ずかしいだろ」

「キュンッー！」

頬を少し赤く染めて、スネたように呟いた審斗から、見えない銃弾が飛んできた。

ピンポイントで私を撃ち抜いて、危ない、もつ少しで再起不能になるところだった。

照れる宿斗ーー長年「幼なじみ」をやつているけどほとんど見たことがない。貴重だ。

「かわいい…」

思わず呟くと、宿斗が眉を寄せたので、慌てて叫ぶ。

「いいからーー着てーーねーー？」

「……」

無言のまま繋がれた手を離てから、マフラーを外し着ていたライダースを脱ぐと、私に差し出す。  
あ、持つてろってことね。はいはい。

それを受けとると、宥斗はまずカーキのポートから袖を通す。またしても危なかつた。かわいい、は高校生男子には言つてはいけない言葉だつたらしい。

着終えると、やはり恥ずかしそうに元気を向く。

「えへへ……せつぱんごう似合ひねえ」

ニズビとは、パートの名称で、ミリタリー パートのようなものだ。丈が長く、だいたい膝上くらいまで、薄いのからモフモフしたのまで色々あるが、宥斗の着ているのは裏地がキルティングになつていて暖かそうだった。

フードにはファーがあしらわれていて、宥斗の小顔っぷりを強調する。またそのファーがよく似合う。

じこつと見つめていると、有斗の顔がますます赤くなる。なにこれ。ちよつと楽しげ。

いつもやられてばかりいるので、たまには仕返しどばかりに声あがめる。

「秘密… なぜか、こんだめ。」

「写メ撮つていい? 照れる宥斗貴重すぎる」

「ひめせ」

「ヤーヤしながら携帯を取り出す私に嫌そうに言つて、カーキのコートを脱いでもう黒のコートを着る。からかいすぎたのか、照れ顔は完全に不機嫌顔に変わっていた。残念。

「ん~。黒の方がしつくじくるんだけどな……でもカーキも新鮮でいいつてゆうか」

宥斗は基本的に黒い服を着ることが多い。黒の方が宥斗っぽさがあつたけど、カーキも新鮮で良かった。これは難しい…。

考える間にコートを脱いで、私の手からライダースとマフラーを取る。そして、着ながら言つ。

「どうち?」

「ん~……やっぱり……」

「黒?」

「うん。見慣れてるせいもあるかも知れないけど、黒の方が似合うし宥斗っぽい。」

「じゃあ、いっしにすむ。ありがとな」

「うわーー私の決定がホントに最終決定なのーー?」

「ちょっと待つて」と、宥斗は黒いコートを持ってレジに向かう。

「なんか。

なんか今のやりとり、ちょっと恋人同士っぽくないーー?」

私はもともと買い物は一人で行く派で、みのりともセールの時くらいしか一緒にには行かない。このスカートを買つてもうつた時はイレギュラーだ。

セールの時は、たいてい建物の入り口解散、出口集合。各自好きなショッップを回つて、どうしても迷つたら合流する。その後カフェとかオケで戦利品を見せ合つという流れだ。

あの時は珍しく、みのりも私のお気に入りのショッップについて来て、「足を出すことがいかに大事か」について熱弁しました。

足は、出さないと筋肉が急けて太くなるらしい。いつも出して緊張状態を続けると、自然と細くなるそう。みのりの持論だけど。

「紗衣はそれより、女子力向上が目的！」だそうで、パンツスタイルばかりではもつたまらないし、スキのある格好をすることこそがモテの秘訣なんだと拳を握つていた。

別にモテたくもない私は、新作のデニムを漁つていたが、振り向いたらみのりがレジで買い物を終えていた。

その中の一着が誕生日プレゼントと称して無理やり買つて頂いた、今日のスカートである。

そんな買い物一人派の私が宥斗にうまくアドバイスできたかは謎だけど、選んだ服を買つてくれたのはうれしかった。

たまには誰かと買い物に来るのもいいもんだなあ。まあ宥斗とだから、かもしれないけど。

みのりはともかく、異性なら宥斗以外とは考えられない。これも恋心つてやつか。

宥斗のレジがなかなか終わらないので、店内を見て回る。

このお店の洋服はどれも宥斗に似合ってやうで、いつセイイメージモードでもやつたらいこんじやないかと想つほどだった。

その中で、ふと、白いマフラーを奪われる。

触り心地のいいふわふわのマフラー。かわいいなあ……。

手ひとつ見てみると、レジから手ぶらで宥斗が戻ってきた。

「悪い。新しいの出して貰るみたいで、今倉庫に取りに行っている。」

「あ、やつなんだ」

「それ、欲しいのか?」

宥斗が私の手にあるマフラーを指差す。

「やうこいつわけじゃないんだけど、ふわふわでかわいいなあと想つて」

「多分、これの色違い」

自分のしている黒いマフラーをつまんで持ち上げる。よく見ると、本当だ。今持っているマフラーの色違いだ。

「あ、ホントだ。そのマフラーで買つたの?」

「ああ。この前来たとき」

セツキマフラーの試着している時に見たのに気づかなかつた。

だけど、自然と同じものを手に取つたのは嬉しい。

さすがに分かつていてお揃いを買つのは恥ずかしいので、話なが

らそつと棚に戻す。

「かわいいね。白にマフラーつけて持つてないから困つこちやつた」

「今日の服に合ひやうだな」

棚に戻したマフラーを宥斗が手に取つた。

それをふわっと私の首に巻き付けひる。顔回りにある宥斗の手にドキドキする。

「……うん。似合ひやん」

やんわり笑つて言われると、恥ずかしくて恥ずかしくて、セツキ宥斗をからかつた事を心の中で詫びた。

「これ、買つたら使つか?」

「あ、うん。制服にも合ひやうだよね。でも今日はやめ……」

まだ話してゐ私を無視して、宥斗はそのままレジに向かうと、倉庫から戻つてきたらしい店員さんには白のマフラーを渡す。

ええー? 買つてるー?

「宥斗! ……いいつでー!」

レジに駆け寄れると、小声で宥斗に叫ぶ。

その間にせせらぎさんはマフラーのタグを切ってレジを打つ。  
あ…。

「ちゅうと早めのクリスマスプレゼント。今年は何にしてか悩んでたから、ちゅうどいいだる」

宥斗はお財布を出して、提示されたお金を払いながら言つ。コートとマフラー。バイトもしていない私からしたら大金だ。宥斗だつてしていなのはずなのに、なんでそんなにお金持つてるの！？

私と宥斗は、毎年クリスマスと誕生日にはプレゼントを交換している。もう何年も続く行事のひとつだ。

予定日が同じだったらしい私達の誕生日は1日違い。宥斗が8月12日。私が8月13日。

毎年夏と冬に2回。相手に喜んでもらえるプレゼントを考えるのはなかなか難しくて、最近のプレゼントはギャグ化してる感がいなめない。もちろん私はそんなプレゼントを選ぶのもとても楽しいけど。

だから宥斗の気持ちは分かる。でも今日はお金を出してもうこすぎだ。しかもお揃い…つ…嬉しい。嬉しいすぎる。でも。

お店の外に移動した私のところへ、宥斗がコートに入つた袋を肩から下げてやって来る。

「はい。メリークリスマス」

白いマフラーは袋に入つておらず、また宥斗によつて首に巻かれる。すぐ使えるよつてそのままもつてきてくれたよつだ。

「…早くない？」

明らかに口を開いて、机の上を向いて答える。

「昨日はなにからな。文句つねよ」

「言わないよ……」

宥斗の首もとに視線を移せば、当然同じものが巻かれている。お揃い。…嬉しい…でも恥ずかしい。そればっかりだな、自分。

「…ありがと」

「どういたしまして。お揃い、だな

お揃い、の部分を激しく強調して宥斗が言つ。私がそれを恥ずかしがつてこる」とこ氣付いているんだろう。意地悪だ。いつものことだけだ。

また並んで、ショッピングモール内を歩き出す。

自然に繋がれた手が「じそばゆい」。ギコツと握ると、会話の途中でも、握り返してくれる。

「他に行きたこと」いろはある?」

私が訪ねると、ちょうど建物の案内図がある場所で、宥斗は歩みを止める。

「俺はこれ買ったからもつ満足。ほり、紗衣の行きたいところ選べ」

「ん~…」

パネル式の案内図は、タッチすると、そのお店の情報が細かく出てくる。まるで最新の携帯電話のみつだ。

私は田舎での店を探し続ける。

「あ」

「なんかあつた?」

「田舎に行きたい」

「アクセサリーショップ? でもこれメンズブランドだぞ」

「いいの。ここがいい」

ふーん、と言いつて、お店の配置が全くわからない私を、宥斗が引っ張つて先導してくれる。

田当てのアクセサリーショップに着くと、宥斗は手を離してそっぽをむいた。

「宥斗？」

「…俺、いない方がいい？」

なんで不機嫌？

何をどうしたら、宥斗がいない方がいいのだろう…頭の中を見せてみろ…！」

最近ポイントがよくわからないから困る…！

不機嫌、といつよりもスネた風な宥斗を見上げて困惑する。

「いや、宥斗がいないと困るんだけど」

「なんで」

今度はあからさまな不機嫌な態度。もつ、なんなのっ！？

「宥斗にクリスマスプレゼントを選びたいから、一緒にいて…！」

「え？」

驚いた顔で呆ける宥斗を店先に残して、私は店内へ入る。

普段ならひとりじゃ絶対入れないお洒落な店内は、周りを見ると緊張で怪しい動きをしてしまいそうなので、品物のみに集中する。

ここには、先日読んだ雑誌の、「クリスマスプレゼント特集！－」と  
いつページに載っていたお店だ。

確かに、「男の子がもりつてうれしこアランデキンギング」みたいな感じだったと思つ。

今年のクリスマスプレゼントはピアスにしようと決めていたので、男性ブランドなど分からぬ私はみのりに教えてもらいながら一緒に雑誌を見ていた。

先ほどみた案内図で、たまたま見覚えのある「ブランズ」名を見つけていたので、連れてきてもらつたのだ。宥斗の氣に入るものがあるといいけれど。

うん… やつぱ高いなあ。

でも、今田はたくさんお金出しどもいらしゃったし、今年は奮發だ

ひとりで息巻いていると、宿斗が真後ろにいた。

うわー！？ どうしてこんなに早いの？

一  
俺に?

「やつだつてばーー！」

がなりながら、何にそんなに驚いているのか不思議でたまらない。 翁斗以外の誰にプレゼントしろといふのか。

「……いや、誰かにやるプレゼントを選ぶのかと」

「だから……プレゼントあげる相手なんか宥斗へらいしかいないもん……」

「いや、うそ。……やべえ、嬉しい」

満面の笑みで、ぽんぽんと頭を撫でられる。

うん、あの、こつまで撫でてるの。嬉しいけど恥ずかしいってば！…いや、ずっと撫でてもいいけど。

先ほどからの連續スキシンシップに、私の心臓もいい加減耐性がついたようだ。ドキドキはもちろんしているけど、爆発寸前まではいかない。

ほんのりとした幸せを、ただ感じられる。

「……宥斗、ピアス開けたいって言ひてたでしょ。だから今年のクリスマスプレゼントは、ピアスにしてよ！」

宥斗が私の頭からすっと腕を引いて、手を繋ぐ。

「久しぶりのまともプレゼントだな」

「……最近のプレゼントを思い出したのか、おかしそうに笑いながら宥斗が囁く。

「あれだって、すつ」「こ悩んで決めてるんだからねー？大ににしてよー？」

「わかつてゐて。」

ギャグは中途半端ほど恥ずかしいものはない。やるなり、いかれる  
くらいことん！－な私は、ギャグなプレゼントを探し当てるため  
に通販だってする。

何をプレゼントしたかはあえて語らないけど、内容的には、笑いは  
取れるだらうけど私なら絶対欲しくないものだ。以上。

「そういうや紗衣もピアス開けたいって言ってたな」

思ひ出したよつて、宥斗が言つて。

「うん。でも卒業してからにする」

「真面目だなあ、紗衣は」

「あんたが不真面目すぎるの……」

「はいはー」

宥斗は、うーん、と唸りながらいろんなピアスを見ている。  
もちろん店内にはいろんなアクセサリーがあって、宥斗にすうじ似  
合つそうな指輪があつたけど、眺めるだけで我慢した。

指輪は、贈れない。

私は「幼なじみ」なんだから。

「これ、いいな」

「…宥斗？確認だけど、ピアスは耳に開けるんだよね？」

宥斗が手に取つたそれを見て、恐々聞く。

「他にどこで開けんだよ。鼻か？」

「ホントやめて」

持つてこるピアスを鼻にあてる宥斗を速攻で拒否する。

「紗衣、鼻ピアス苦手だっけ？」

「みのりが2年生の時に、鼻にピアス開けたのね。でも上手く穴が安定しなくて、もう恐ろしいほどに膿んでたの。それを毎日間近で見てから、鼻にピアス開けてる人見ると痛そうで……」

思い出しだけでも鳥肌がたつ。

その時は、「見てて痛いからバンソロウしてくれ」とみのりに頼んだのに、ことあるうち、「めんどくさい。私には見えない」と言い放つた。

結果、みのりの鼻に毎日消毒して、バンソロウを貼つつけていたのは私だ。

女子高生のポケットに常にマキロン。あんまりいないだろう。  
それでも穴が閉じるのにだいぶかかった。もうこれっきり、思い出したくもない。

「ああ、毎日マキロン持つてた時のやつが

宥斗も覚えていたらしい。顔をしかめる。

「やつ。で、宥斗はファーストピアスから、そんな大きい穴をあけるつもりなの？」

「こきなりは無理だろさすがに。拡張器買つて、徐々に広げんだよ」

「痛いーーー想像しただけで痛いーーーー！」

開いてる方の手で耳を塞ぐ。

宥斗が選んだそのピアスは、普通のピアスよりもだいぶ太い。シルバーの丸い玉がついていて、別のピアスとセットになつている。こちらは普通のサイズのフープタイプのもの。模様が施してある。

「紗衣は痛くねえだろ」

「見てるだけで痛いんだってばーー！それにしてもいいけど、当分宥斗と田舎合わせないからねー」

いくら恋する乙女でも、恐ろしいものは恐ろしい。あれが宥斗の耳についていると考えただけで顔を見れる気がしない。膿んだらもつと恐ろしいことになる。ブルブル。もう完全にトラウマの域だ。

私もずっとピアスを開けたかったけど、みのりのを見て一気に開ける気がうせた。

だけど、耳たぶに普通のピアスならみのりもいくつもしていて、それが膿んでるところは見たことがない。みのりが大丈夫ならまあ平氣だろ、とちょっとひどいことを思いつつ、また開けたいな、という気持ちが最近復活したのだ。

「…じゃあやめる」

「え？」

「こは「じゃあ見んな」って返してくれるんじゃないの？  
いつもの対戦なら。

「紗衣の顔が見れないのは嫌だ」

「…………！」

不意打ちで爆弾を落とすのはやめて頂きたい。  
そちらにその気はなくとも、こちらは相当のダメージを食らつのだ。

やつぱり今日の対戦はおかしい。甘い空気がパンパンビンビンじゃない。ダダメーレだ。

「じゃあ、これにするか」

爆弾を投下した本人は、すっかり気を取り直して新しいお気に入りを見つけたらしい。

「ペアピアス？」

初めて見たそれは、先ほどの模様の入ったゴシめのフープピアスと、同じ模様の華奢な、やはりフープピアスがセットになつていてるものだった。ちなみに普通サイズ。  
これどう考へてもカッフル用だけだ。

「紗衣が開けるまで待つ」とあります。」

「一緒に開けるつ」と、「

首を傾げて聞けば、宥斗は笑って頷いた。

「同じ時に開ければ、瞼のものも同時だろ」

「その話題から離れて……むしろ極力瞼まない方向で進めて欲しい  
んだけど……？」

爆笑している宥斗を睨みつける。

「卒業式の日に、一緒に開けよつ

照れも何もなく、優しく微笑む。私の一番好きな、宥斗の表情。

「…またお揃い？」

「ああ。」

「宥斗、お揃い好きなの？」

それこそ新事実だ。

でも、誰彼構わずお揃いにされたら私としてはたまつたもんじゃな  
い。繋がった手に力を込めて訪ねた。

のに。

返ってきた言葉は。

「別に。好きじゃねえ」

「どうちだよーーー。」

思わず鋭いツツイをお見舞いしてしまった。耐え性がなくて「めんなさい。」

「紗衣、これがいい」

手に持っていたピアスを私に差し出す。

「…でも、これじゃ私の分もプレゼントある」とこなつちゅうわ。

いくら多少割高商品とせば、半分自分のものになってしまったから、今日払つてもらつた金額の割に合わない。  
お揃いがまたひとつ増えることはもちろん嬉しいけど、それでは本末転倒のような気がした。

「これが欲しい。」

はつきりと強い意思を見せつけられては、もう何も言えなくなる。「わかった」と返してレジへ向かう。

一応クリスマスプレゼント仕様に包んで机の上から、先にお店の外に出ていた宥斗に渡す。

「はい」

「ありがとな」

結局半分自分のものなのに、これでいいのか、と私は少し納得がいかなかつた。だけど、いそいそ包みをあけて、さつき見たばかりのピアスを取り出して嬉しそうに眺める宥斗を見ると、喜んでくれるならまあいいか、といつ氣になつてくる。

几帳面にピアスを包み直してから、宥斗が言つた。

「卒業式、楽しみだな」

「… そだね」

微笑んで答えたつもりだったけど、うまく笑えていたかは、私にはわからない。

## No.10 (前書き)

大学のサークル活動について、身勝手な表記があります。  
不快に思われる方がいらっしゃいましたら、申し訳ありません。

そのあと、フードコートにあるお店でおにしあシャーベットを食べ、「寒い季節に食べるアイスはなぜおいしいのか」と、熱弁をふるつていると、「アイスはいつ食べてもアイスだろ」と、実に宥斗らしく返答を頂いた。

一息ついてから時計を見るところを回っていたので、そろそろ帰ろうか、と駅に向かつ。

そこから電車に乗つて、最寄り駅に着くと、家までの道のりを歩く。夕方の日曜日の駅前は、私達と同じく、帰宅するであろう人々で賑わいを見せていた。家族連れやカップル。吐く息が白い。肩を寄せて、または手を繋いで。みんな楽しそうに、それぞれの家へと帰っていく。

ロータリーに植えられている木を見渡すと、どの木もとうに葉が枯れ落ちている。

落ち葉を踏みしめれば、シャリシャリと、小気味いい音がした。

田線を下に向けたので、宥斗にフレゼントしてもらった田川マフラーが目に入る。

お揃い。それは嬉しい。嬉しいんだけど……。

ちぢりと宥斗を見れば、視線に気づいたのか、宥斗が先に口を開く。

「なに」

「…宥斗、そのマフラー学校にもして行く?」

宥斗が制服姿でマフラーを巻いているのは見たことがない。私としてはぜひ学校にもして行きたいが、万が一、宥斗もこのマフラーをしてきたら。お揃いのマフラーを巻いて登校する、なんてことになれば、宥斗親衛隊のみなさんを直撃されることになりかない。

ずっとそのことが気になっていた。

卒業まであと少し。できればこんな時期に波風は立てたくない。

「今まで学校にはしてつたことねえな。でも明日から使つか

「じゃあ私はやめとこう!」

「なんでだよ。せっかく買ったんだから使えよ

『氣をつけろ』って言つたのは自分なの...わざとか...? 新手の嫌がらせか!?

そのことを誰よりも気にしている宥斗にはありえないけど、私の脳内はありえない方向にシッコむ。

「...なんかされたら、絶対俺に言えよ」

黙った私の意図を汲んだのか、白いマフラーを引っ張つて、言つ。やつぱり氣にしている。そしてつっこむ。心配性。

「なんもされないでしょ。」

宥斗がそのままマフラーして来なければ、と心中で付け足す。

「 もうつい遣つのはやめたから」

?なんの話だらう。まさか親衛隊のみなさんに氣を遣つていいのか。

「 もうすぐ卒業だな」

さすがに話をそらされたことに氣付いたが、話したくないことなんだろう。深く追求はしないでおぐ。

「 そだね。もう一緒に学校通えないね」

「 反対方向だしな」

私達はもう推薦枠での大学合格が決まっている。

高校は、家から近いのと、「 寝斗が一緒だから」というので決めてしまつたけれど、大学は違う。

将来に繋がる大切な選択、もつそんな子供じみたことは言つていられない。

私は将来外資系ホテルでのフロント業務に就きたいと思つているので、いろいろな国の言葉を学べる英文科のある女子大へ。寝斗はスポート医療を学べる四大へ、それぞれ進学する。

路線は同じとはいえ反対方向に位置する大学に、共に登校するのは不可能だ。

「 なかなか会えなくなるだらうね。なんか寂しいね。」

これがもし「 彼女」なら、帰宅時間が合つ時はどこかで待ち合わせて、今日のように買い物でも楽しむのだらうか。

「幼なじみ」の立場を痛烈に実感した私は少し寂しくなる。胸が痛い。

「会えるだろ。毎日飯届けに来てくれるんだし」

「あ。言つてなかつたつけ? うちのお母さん、私の卒業に合わせて仕事やめるの」

「はー? 聞いてねえよ」

心底驚いた顔の宥斗を見て、この話をしていなかつたことを認識する。

「『めん…話したつもりでいたんだけど。私が大学に入れば、ひとり子育てにかかるお金もなくなるし、もう仕事辞めて主婦に専念するんだって』

「…おばさん、本当に仕事辞めるのか」

「うん…もしかしたら、私が家事を手伝つたせいで、心苦しかったのかなあつてちょっと心配してたんだ」

「そんなことねえだろ。少なくともうちの親は、平日紗衣の飯が食えて喜んでる」

「そつか。それならよかつた」

私の母親は、私が小さい頃から働きに出でていたけど、出来る範囲でいつも家事を頑張ってくれていた。

遅くまで働いてから、家のことをやる母親の体調が気になつて、夕飯の支度をやつてきたが、母はいつも食卓に並べられた夕飯を見て申し訳なさそうにしていた。

「高校生なのに、『ご飯の支度なんてやらせて』『めんね』、『遊びに出たいだろ』に、『めんね』といつも言つていた。

だけどそれとは裏腹に、私の作ったごはんを、「おいしい、おいしい」と喜んで食べててくれる父と母を見るのが嬉しくて、母の就寝時間の早くなつたのが嬉しくて、皿口満足で夕飯の支度を続けていた。

掃除も洗濯も、お弁当作りも母がやつてくれる。

私は本当に夕飯を作るだけ、だ。遊ぶのは土日で充分だし、料理は好きだから全く苦じやないと母には伝えきたつもりだったが、もしかしたら重荷だったのかもしれない。

「気になるならおばさん』にかやんと話せよ。お前がそんなに落ち込んだら、おばさんだつて悲しむ」

「ん。そだね。ありがとう」

「じゃあ卒業したら、もう紗衣の飯食えねえなあ」

「大学入つたら、サークルとかもあるだらしあで』はん食べる方が少ないかもよ」

宥斗との接点は、卒業を機になくなつていぐ。わかつっていたことだ。それでも、「幼なじみ」を選んだのは自分なのに。

今日が楽しすぎて、この先を望んでしまつ。宥斗と、ずっと一緒にいたい…。

「紗衣も？」

「何が？」

「紗衣も、家にいること少なくなんの？」

「いや、私は女子大だしねえ」

「それ別に関係ねえだろ。むしろ女子大のがコンパとか多そうだしな」

「そういうもんなの？」

「いや知らねえけど」

ならその情報はどこ調べなんだ。小さく笑つて私は言つ。

「コンパとか、あつても行かないよ。出会いなんて欲しくないし」

最愛の人にはもう出会つてゐる。

世界が狭いかもしれないけど、別にいい。私は宥斗がいい。

「俺だつてサークルなんか入らねえよ。人を遊び人呼ばわりするな

いや、だからそれサークルに入つてゐるみなさんに失礼です。宥斗の代わりに謝ります、ごめんなさい。

宥斗がサークルに入らないといつこにはほつとした。身勝手だけ  
ど、出来ればこれ以上、女の子の敵は増えて欲しくない。

だけど。いのままじや…

「でも、きっと今みたいには会えなくなる」

宥斗の顔が見れなくて、前を向いたまま告げる。  
認めなくちゃ。弱い自分を。他の誰でもない、宥斗の前で。

私は「幼なじみ」。

この一言は、それを何よりも象徴する。

「…………。」

話ながら、ちよつと家の前に着いた。

私から、繋いだ手を離す。

宥斗は黙つたまま顔を上げない。

「今日はホントに楽しかった。ありがとつ宥斗。また、明日ね」

「…ああ。」

先に宥斗に背を向けて、小走りで家の中に入る。

ブーツを投げるよう脱ぐと、階段を勢いよく上り、自分の部屋に入ると、そのままベッドにダイブした。

新しいお話を、一瞬で読み終わるくらいに触り部分だけですが投稿しました。

「幼なじみ」が完結次第更新していくことと思っていますが、なんせド変態が私の脳内で暴れまわるので、もしかしたら「幼なじみ」と平行してそちらの更新もするかもしれません。  
もちろんこちらを優先して更新していきますが、よろしければ「一読ください」。

たくさんの方に読んで頂いてるようで、予想外のこと驚いています。とても嬉しいです。引き続き12月中の完結を目指して頑張ります。よろしくお願いします。

スカートがしわになりそうだけど、そんなこと今はどうでもいい。別れ際、黙り込んだ宥斗の事が気になる。だけど顔を見たらやつと決心した気持ちが鈍りそうで、逃げるよつに帰つてしまった。

宥斗はなぜ黙つてしまつたんだろう。

いくら考えてもそんなの、私にはわからない。宥斗にしかわからないのだ。聞かなきゃ、答えは出ない。私はそれをしなきゃいけない。怖いくらいに思考が冴え渡つてゐる。これが、背水の陣でやつなんだろうか。

今朝、出掛けのまでは、「幼なじみ」なりゅうと傍にいたられると思つていた。

だけど、それは大きな間違いで、ずっと傍にいたられるなんてことはありえない。

宥斗にもし「彼女」ができたら、宥斗は今日のよつに「彼女」と過ごすんだろう。

そうしたら、私と一緒にいることなんてしなくなる。

当たり前だ。「彼女」より「幼なじみ」を優先する男がどこにいる。

仮に、宥斗にこのまま「彼女」ができなくても、一緒にいたられるのは卒業まで。

そこから先は、もつそれぞれの道を行く。

私も大学に入つたらバイトをしたいし、コンパには行かなくてもきっと友達と出掛けることも増えるんだろう。

宥斗だつて同じだ。

夕飯は母が作るようになつて、届ける名前で会うことも叶わない。いや、届けるだけならできるかもしれないが、そもそも今のように、毎日決まつた時間に家に帰る生活じゃなくなる。

なんて浅はかな勘違いをしていたんだろう。

「幼なじみ」では、宥斗の時間を独占することなんできかないのに。宥斗も、私に会いたいと思つてくれなければ、会うことすら難しくなる。

宥斗と話していく実感した。

自分はそのことにぐくに気づいていたのに、振られるのが怖くて、逃げていただけだ。

宥斗の行動の意味を考えてもやっぱり分からない。

期待する気持ちがあつたのは最初だけで、ベッドに押し倒されたのも、手を繋いだのも、かわいいと言われたのも、お揃いのものを貰つてもらつたのも全部事実だけど、やっぱり私以外の子にもするかもしれない。

それだつて、聞かなきゃ始まらない。

もう逃げるのはやめよう。

逃げても、宥斗とずっと一緒にはいられない。

そのためには、この気持ちを宥斗に告げなくちゃ。  
どうせ一緒にいられなくなるなら、気持ちを伝えてからがいい。

そして、出来る限りならこの先も宥斗の隣いるのは私でありたい。

言おひ。

宥斗に。

失うこと恐れるほど、私が一番大切なあなただから。  
欲張りで、『めん。

「幼なじみ」じゃ嫌だ。

私、宥斗の、「彼女」になりたい。

「…紗衣。さ~え~!~!」

۱۰۷

「もう少し起きてよ」

— 9 時 … 9 時 ?

ガバッと起き上がり顔面蒼白になる。私はいつの間に眠ってしまったんだわつ。

「ちつ遅刻ー！！！」

## 一 大丈夫。夜の9時だから」

慌ててベッドから飛び降りた私に、母がのんびりと並ぶ。

夜かなんたあゝ

ひぐりした。白癡じやなしが今どこのNINに勤貢なのだ。

もつすべ卒業なのよ。

「あれ、お母さん？帰りは月曜日の夜じゃなかつたつけ？」

寝起きのせいもあるだろう、思考にふけりそうになつた自分に待つ

たをかける。

出張でいなはずの母が、エプロン姿で私の部屋にいる。

「仕事が早めに片付いたの。最後の出張終わっちゃった——開放的でいっぱい！！」

「口ニ口笑いながら晝ひ母に、先ほどの着斗との会話を思つて出す。聞いてみよう。ちゃんと。

「お疲れさま。お母さん、『はん作ってくれたの？』

やはりシワだらけになつてしまつたスカートを払いながら、着ていたコートを脱ぐ。

布団もかけずに眠つてしまつたのに、温かかったのは『の』のコートのおかげらしい。

私の人生においての、一大決心をしていたはずなのに。間抜けなどだが、うたた寝をしてしまつたようだ。うたた寝、といふには少し長い眠りになつたが。ここ数日続いた寝不足のせいだろう。あの高揚感を返してくれ。

あのままの勢いなら、すぐこども着斗に伝えに行けた、かもしない。

「うん。久しぶりにケーキも焼いたの。お父さんは予定通り明日の夜になるみたいだから、一緒に食べよつ」

「わー……うれしい！何のケーキ？」

「紗衣の好きないち』のタルトだよ。出張先で、早ものの『いち』が売つてたから、たくさん買ってきちゃつた」

「ありがとう…すぐ着替えちゃうね」

「ちーじーのタルトと聞いて一気に眠気が吹っ飛ぶ。母の作るケーキはどれもとてもおいしいけど、無類の「ちーじ」好きの私に、そのケーキは何よりの「駄走だつた。

部屋着をクロゼットからだしでこね、まだ私の部屋にいた母が言ひ。

「あらあらー今日はずいぶんかわいらしい格好してゐるね。デート？」

完全に面白がつている。でも期待にお答えできなくてすみませんね。

「トートじゃない。寝斗と映画見てきたの」

「あや～…ゆづりちゃんとトートだつたのー?」

「だから…トートじゃなーつ…」

人の話を聞いて欲しい。何をそんなに喜んでいるのかよくわからな  
いけど、まあ楽しそうだからいいか。ゆづりちゃん、とはもちろん寝  
斗のことだ。

「そんなに短いスカート履いて…ゆづりちゃんヤキモチ焼かなかつた  
あ?」

「ヤキモチは焼かれてないけど、なんか怒られたよ。最後までぶつ  
ぶつ言つてた。そんなに短いかな。見苦しい?」

自分のスカートを見下ろす。母にまで指摘されるとは、やはり短いんだろうか。制服と変わらないと思つていたけど、短かすぎて見苦しいのかもしれない。

「全然……よく似合つてるよ。せつかく私譲りの綺麗な足してるんだから、出やないと……」

私譲りって。お母さん、勘弁してください。

「みのりにも言われたの。足を出せって」

「そのスカートみのりちゃんに誕生日の時にもらつたやつでしょ？ いつ履くのかな」と思つてたけどまさかみのりちゃんとのデートに履いてっちゃうとはねえ」

やれやれ、と頭を振りながら言られて、デートじゃないっていう私の主張は再度無視された。

1人ファッションショーの成果を一度も、それも別々の人から否定されてちょっと打ちひしがれる。

「髪もかわいいよー紗衣。美人に産んでくれてありがとう、って言つてもいいよ？」

「いつのことはおかまいなしに続ける母に、げんなりする。

「美人に産んでくれてアリガトー」

全くもつてそんなこと思つてもないけど、棒読みで答える。私が美人なわけあるか。

「どういたしまして~」

ケラケラ笑いながら、母は私の部屋を出て行く。部屋着に着替えてリビングに向かえば、ダイニングテーブルの横に思わずソックミを入れずにはいられないほどこの箱が、山積みになっていた。

「こや、買こやすあでしょ」

「紗衣箱食いしていいよ~あとで麻理子ちゃんとこにも持つて行こう思つてるから、その分はとつておいてね」

キッチンから料理を運んできた母は楽しそうに言つ。

麻理子ちゃん、とは宥斗の母親のことである。ちなみにひの母の名前は紗理奈というが、母親ふたりは未だにお互い名前をちゃん付けで呼びあつている。

「わあがここんなに食べれない……」

「そんな事言わないで食べて~。」

この量を新幹線で持つて帰ってきたのか。相変わらずものすごいバイタリティに頭が下がる。

「手伝つむ

「あつがとう。じゃあ、スプーンとお箸と、小皿並べてくれる?」

うん、と返事をして、食器棚を開くと、隣に立っている母が「あら」と声をあげる。

「紗衣、つけまつげしてたの？」

「うん。みのりに自然なつけまつげ教えてもらひたの。化粧の時間短くなつたし、便利だよ」

さすがに田代とこ。だけど、寛斗と出かけた後だと知られているので、張り切つてお洒落をしたのがバレるのは恥ずかしかった。いや、多分もうバレてるけど。

「近づかないとわからなかつたなあ。上手に付けたねえ。最近のつけまつげってすげーこのねー。すげーこの自然！！」

「アリガトウ……」

娘をそんなに誉めないでくれ。

うちの母は、化粧品会社に勤めている。だからなのかはわからないけど、私が少しごつもと違つたメイクを施すと、すぐに気づく。

「おひかやん気付いた？」

でつかい田を二田田型に締めて笑う母。

「…つ気付いてない…！」

今し方、近づかないとわからなかつたと言こませんでしたか！  
そういう意味ですか！？

恋愛思春期の娘をからかうのもいい加減にして頂きたい！…泣くぞ

!!

「なあ～んだ。やつとラブ<sup>ラブ</sup>な一人を見れると思ったのにい～」

残念。と言ひながら母はダイニングテーブルに足を向ける。

どんな誤解をしているのかわからないけど、私は今日映画を見に行つたんであつて、至近距離で見つめ合つようなことはしてない！！と、脳内でツツこんでから、明かりの落とされた映画館での宥斗を顔を思い出して、ほんつと小爆発を起こす。

「やつぱりなんかあつた！？」

「ないつ……！」

ダイニングで母がグラグラ笑い声を上げている。

この状態の私を見て、何もなかつたといふのは不可能なことは分かつていたけど、おかまいなしに否定する。

近付かなければできない行為はしていないけど、至近距離には、宥斗の顔があつた。綺麗な顔。思ひ出すとさらに顔に血が登るのを感じて、必死に脳内メモリを閉じる。しばらくはこのメモリに悩ま続けるんだろう。幸せなことだけ。

準備を終えて、「いただきます」と声を合わせてから、一人で食べ始める。遅めの夕食だ。

「お肉ホロホロ……おいしぃ。お母さんの作つたシチュー食べたかったからうれしい～」

田の前のビーフシチューを食べれば、先ほどまでからかわれていたのなどすでに記憶の彼方に飛んでしまった。

圧力鍋でホロホロに煮られた牛スネ肉は、煮込まれたシチューと絡んで最高においしかった。

どんなに毎日夕食を作つても、母の腕にはほど遠い。やつぱり母の料理が一番だ。幸せ。

「ふふつ。たくさん食べてね。食後にタルトもあるから、その分はお腹開けておいで」

「タルトは別腹だもん~」

付け合わせのシーザーサラダもむしゃむしゃ食べる。クルトンも手作りしてくれたんだわ。市販のものとは一味違う。疲れて帰ってきたのに、私のために並べられた手の込んだ夕食が、嬉しくていつもよりたくさん食べる。

ふと、視線を感じて顔を上げると、母が微笑んで、私を見ていた。

「なあに?」

「ううん。大きくなつたなあつて思つて。つっここの間まで、ママ～つて、私が見えなくなると泣いてたのに。」

慈しむよつな瞳の母は娘の田からみても、とても美しかった。最後の出張を終えて、思うところもあるんだろう。

「だいぶ昔の話じゃない?」

なんだか照れくさくて、笑いながら返す。

「お母さんにとっては、つい最近なの。…髪も、高校に入った頃は短かったのに、そんなに伸びたのね。毎日見てるはずなのになあ」

苦笑しながら言つ母が切ない。なぜそんなに自分を責めるんだろ？。後で必ずちゃんと話をしよう、と決心を新たにする。

「こいつの間に長くなっちゃったなあ。それそり切れりつかな」

父譲りの真っ黒な私の髪は、胸下まで伸びている。

ごはんを食べる時に、つこいつかりお皿に入つてしまつたりして、邪魔になることが多い。

こだわりがあつて伸ばしているわけではないので、そろそろ髪を短くしたいと思っていた。

「今日麻理子ちゃんちゅうび休みだし、切つてもうらえば？」

「ん~今日はいいかな。巻こちゃつてるし」

時刻は午後9時半を過ぎてゐるが、母と宥斗のお母さんの間には、時間の概念があまりない。

休みが合つた日には、ファミレスに朝方まで居座り話し込んでいる。女子高生かっ！

宥斗の母親は美容師をしてゐる。自分の店を持つよりも、人の下で働く方が性に合つようで、近所の美容室でもう長いこと働いている。美容師なのに、「子供たちとの時間が無い……」と言つて土日休みをもぎ取つた彼女は強者。

宥斗のお母さんといつよつは、お姉さんと言つた方がいい程若くて綺麗。さすが、あの宥斗を産んだだけある。うちの母も割と美人な部類に入るので、ふたりが並んでいると、とても子持ちの40代に

は見えない。

ふたりとも実際若いのだ。20歳の時に兄たちを産み、25歳で私と宥斗を産んでいる。43歳。

同じ年で、子供達ふたりも同学年。それも、下の子たちの予定日が同じ。これは運命だ！…とよくふたりで騒いでいる。ちなみにうちの父は母と同じ年の43歳。宥斗のお父さんは、少し離れて49歳だ。

「麻理子ちゃん、最近紗衣に会つてないって嘆いてたよ」

「やつに会つてないかも。平日はおばちゃん帰つて来るの遅いしね」

宥斗のお母さんの働く美容師は、営業時間が少し変わっていて、昼の2時から夜10時まで。片付けをして家に帰つてくるのは11時過ぎで、私はその頃にはもう自分の家に帰つている。

宥斗が中学3年の頃までは8時には家に帰つて来ていたが、高校生になるとお店の営業終了時間まで働くようになつた。

「切つてもうおつかな。今度電話してみる」

「ついでに髪も染めたりやえばー？もつ大学合格したんだし、やつちやえやつちやえ…」

娘に髪を染めるようにすすめる母親。いかがなものか。

うちの高校は公立で規則はないに等しい。偏差値的には上の中とい

つたところでは、一般で受験に挑む子がほとんどだ。みんな今は髪を真っ黒に染めている。

「みんな受験モードだし、染めるのは卒業してからにあるよ」

もつ迫い込みの時期。みんな遊びたいのを我慢して必死に勉強しているのに、自分だけ髪を明るくして登校するのは気がひけた。

「おつかれやんはまつ茶つ茶じやなーの」

「ああ、寛斗はある意味学校中に許されてる感があるからねえ……」

「なんとなくわかるけど」

言つて、母が苦笑する。

「ん~、やっぱり髪切るのも卒業してからにしてよいつ。髪切つて、染めたら気分も大分晴れるだろ?」

「何か落ち込む予定でもあるの?」

不思議そうに母が訪ねる。

自ら自分の心情を暴露してしまった私は慌てて否定の言葉を並べる。

「ないよ……ないない、全然ないです……あ……おかわりしてくださいゅー！」

なぜいきなり敬語。しかも最後噛んだ。しつかりしる自分ー！

母の質問攻めに合わないついでにダイニングから逃げ出す。

危なかつたあ…。

落ち込む予定前提な自分が悲しいけど、勝算が全くわからない以上、告白するなら宥斗を失う覚悟はしなければならない。

おかわりのシチューを鍋ならよそいながら、考える。

産まれた時から、いつも一緒にいた。

嫌がらせにあっても、そんなことより宥斗と一緒にいたい気持ちの方が強くて、離れられなかつた。

宥斗のいない生活は正直想像もできない。

それでも言わなきや。

失う前に気づけて本当によかつた。悲しい想いも、喪失感も味わつかもしれないけど、後悔するよりは、ずっといい。

短く息を吐いて、気持ちを落ち着ける。

私にはもうひとつやらなきやいけないことがあるんだ。

なんでもない顔をしてダイニングに戻ると母は何か言いたそうにしていたが、その口から質問を浴びせられる前に、自分の口を開く。

「お母さん」

「なあに?」

サラダを口に加えながら、母の視線が私に向く。

「仕事、本当に辞めちゃうの?」

「うそ。だつてもう働く理由もなくなるし」

紗衣が無事に大学に合格してくれたからね。と微笑えむ。

「でも、仕事好きでしょ?」

お金のためだけに母が仕事をしていたとは思えない。  
確かに毎日忙しくて大変そうだったけど、女の子のキレイを手伝うことできる素敵な仕事だと、いつも言っていた。  
私のせいだ、それを失って欲しくない。

「私のせいだ、仕事を辞めるなら、『飯作るのはもうやめるから…』

最後は涙声になってしまった。

涙が瞳から溢れ出さないよ」と、必死で耐える。

泣くな。私。泣いたらお母さんが余計に気にする。

部屋着であるフリースのパジャマズボンをギュッと掴み、全身に力を込める。母が慌てたように立ち上がり、向かい合って座っていた私の元へと飛んでくる。

「あらあらー、どうして私が仕事を辞めるのが紗衣のせいだなんて思うのー？」

下を向いていた私を覗き込む母の顔は、とても困っていて、すぐにでも返事をしたかったけど、今口を開いたら涙をこらえる自信がなかつた。

荒い呼吸を何度も繰り返して、気持ちを静める。

「わ、私が……家のこと手伝つたから……お母さん、心苦しかったのかなつて……」

「そんなことないよーーーいつもおいしい」はん作つて待つてくれるので、すく嬉しくよーーー

母は大袈裟に言つと、力を込めてすきで血管が浮きだつている私の拳を、そつと包んだ。

白くて綺麗な母の手。

仕事が忙しくても、家事が大変でも、自分のキレイを怠らない母のその手はとても温かい。

「確かに、紗衣には本来なら私のやらなきやいけないと任せちゃつて、申し訳なのは思つてゐる。高校生なんて人生で一番楽しく遊

## 「元」 べる時期なの

「私は別にそんなに遊びたいと思わない」と涙声で告げれば、「お母さんはやうだつたの」と笑う。

「それも今思えば、だけどね。大人になると高校生でいられる時間は、貴重だつたなあつて思うの。だからそんな紗衣に、家のことをやらせるのは申し訳ないことは思つてゐるけど、それ以上に、紗衣が私やお父さんを心配してくれる気持ちが嬉しいんだよ」

「私の心配は、重荷じゃなかつた……？」

母はかぶつを降つて続ける。

「そんなことは絶対にない。紗衣の気持ちが重荷だなんて、お母さんは有り得ない。他の人がどうだか知らないけど、私は絶対にない。」

いよいよ涙腺が崩壊する。

もう溢れるものを抑えられなくて、嗚咽をこじらして涙を流す。

泣きじやぐる私をそつと抱き締める。腕の隙間から見えた母の顔もまた、涙で腫んでいた。

「紗衣、お母さんが仕事辞める話をしてから、ずっとそんな風に思つてたの？紗衣のせいで、私が仕事を辞めるつて？」

私はもう話すことができなくて、首を縦に降ることで返事を返す。私はもう話すことことができない、首を縦に降ることで返事を返す。私はもう話すことできなくなる。私はもう話すことできなくなる。

「本当に優しいね…紗衣は…。優しすぎて、社会渡つていけるか不安になる」

「親バカだね」と笑う母に私は今度は首を横に降る。

私は優しくなんかない。

母が申し訳なさそうにしていたのをわかつていて、それでも自己満足のために家のことをやつていたのだ。

優しいんじゃない、ただの自分勝手な子供。

抱き締めていた腕をとくと、ティッシュを持つて来てくれて、それから私の隣にある椅子に座る。

ティッシュ、ありがたい。

盛大に咬ませて頂こう。

そんな私を見ながら笑った母も、持ってきたそれで目元をぬぐう。

「…お母さんね、お父さんと結婚したのが、20歳の時で、入籍したらすぐお兄ちゃんがお腹にできてね。だから結婚前の2年くらいだけ働いて、すぐに家庭に入つたんだ」

初めて聞く母の話に耳を傾ける。鼻をかんだら少しすつきりして、涙も徐々に治まってきた。

「毎日幸せでね。子供がこんなにかわいいものだなんて知らなかつたし、子供と遊びながら家のことやつて、お父さんの帰りを待つ、それだけなのに本当に毎日楽しくて」

幸せそうな母の笑顔がそれを何よりも物語っている。

私はテーブルの上にある口ップを手に取つて一口飲み込むと、母に続きを促した。

「もちろんやりたくて始めた仕事だつたけど、未練なんて全然なかつた。若かつたけど、遊びにでたいなんて思つこともなくて、このままずつと専業主婦でいたって思つてたの。仕事するより、子供の傍にいたかった。そしたら今度は紗衣ができる…家を建てよつて話になつたのね」

「ちょっと待つて」と、再度立ち上ると、デザートのはずの「このタルトを持ってきてくれた。

長くなるから、食べながら聞いて、とにかくじらしこ。

タルトを遠慮なくつつきだした私は嬉しそうな表情を見せる。だけど残念ながら、味があまりわからない。

鼻がつまっているせいだろう。

「基礎工事も終わつて、あローンを組むぞつていつ時に、お父さんの会社が倒産しちやつたの。本当に何の前触れもなく、ね。ローンの事前審査は通つてたし、まさかそんなことになると思つてなかつたから、お父さん落ち込んじゃつてね。ほら、お父さんの仕事特殊じやない？新しい仕事もなかなか見つからなくて」

うちの父は、楽器製造の仕事をしている。その中でも塗装の吹き付けをやっていて、かなり特殊な職業だ。

私が小さい頃から毎日遅くまで働いて、休みもあまりない。なのに、「給料が全然上がらない。お母さんの方が稼いでる」と嘆いていたのを聞いたことがある。

だけど父は、その仕事をとても愛していて、家でもよく家具や自転

車の色を塗り替えたりしていた。

一度母に頼まれて、携帯の色を塗り直しているのを見た時は感動した。子供ながらに、お父さんの仕事はすごい、と思つたことを覚えている。

そんな忙しい父だったけど、休みの日は早くから起きて、いつも私達兄妹を遊びに連れて行ってくれた。

たまに早く帰れた日にはお風呂にも一緒に入つていたし、寝かしつけてくれることも多かった。

率先して家事も手伝つていたし、休みの日に母が朝の家事を終えて疲れてうたた寝してる時などは、決して起こさず、父がご飯を作つてくれた。

優しいのだ。いつもふざけたことばかり言つて、母によく怒らつてゐるけど、ふたりは今でもとても仲がいい。

休みの日に母が、宥斗のお母さんと出かけてしまつて、家の隅っこでわかりやすくスネている。

高校生にもなると、父親を鬱陶しく思つらうじ友人もたくさんいるけど、私は父がとても好きだ。

いくつになつても母のことが好きで堪らないらしく、いつも追つかけ回しては一喝されてしまふばかりしている。

私達兄妹にもとても優しくて、基本的な躾には厳しかつたけどその他のことでもうるさく言われたことはない。

話せば、どんなに小さな話だって、大袈裟に反応して聞いてくれて、何かを頼めば必ず力になろうとしてくれる。

掘の深い、整つた顔の父は最近ちょっと出てきたお腹を心配しているけど、私にとつてはいつまでも白爛の「お父さん」だ。

「それで、ようやく決まった新しい仕事が、本当にお給料が安いですね。ローン払つたらもう毎月ギリギリの生活だったの。私は節約も楽しんでやつていたんだけど、紗衣が幼稚園に入るころかな。お父さん、仕事を変えるつて言い出して」

责任感の強い父のことだ。

きっと、節約して自分にはお金を使わない母を見かねてそう呟つたんだろう。

当時の様子が目に浮かぶ。

「私は自分の好きな事を仕事にして、それに誇りを持っているお父さんが大好きだったの。だからどんなにお給料が安くても、塗装の仕事を続けて欲しかった。確かにお金を稼ぐことは大事かもしれないけど、それだけじゃないじゃない？」

「うん」と私が頷いた時には、タルトの乗っていたお皿なキレイに空っぽになっていた。

「じちそうさま。また明日も食べよつ。

「紅茶飲む？」と聞かれたけど、首を横に振った。それより早く話の続きが聞きたい。

「少ないお金でやりくりするのは楽しかったし、お父さんとあなた達がいるだけで私は満たされてた。だけどお父さんにはそれが辛かつたのね。ちょっとした贅沢もさせてあげらなくて、悩んじゃつたみたい。仕事を変えるつて言つた時、そんなことするくらいなら私が働くつて、紗衣がまだ幼稚園に行つてゐる頃からまた働きだしたの」

母が働いていたのにはそんな理由があったんだ。

私はもう開いた口が塞がらなかつた。

うちはず「ぐく裕福ではないかもしれないけど、貧困とこうほど貧相な思いをしたことはない。

それは母が働いてくれたおかげだつたのか…。

「最初はねー、辛かつたなあ。子供達と一緒にいられる時間が少なくなつて。特に思春期に入ると、やつぱりいろいろあるんでしょ? そういうの傍で支えたかったのに」

「全然できなかつた」と、涙を流す母を見て、私の涙腺はまたしてもあつたり崩壊する。

「そんな…そんなことないよ。お母さんもお父さんも、いつも私達のことばっかり考えててくれてたじやない」

5つ上の兄でやえ、「俺は家族に恵まれてるな」と、いつかのお正月に酔っ払つた時に話していた。

同じく酔つた父はそれを聞いてわんわん泣いていた。「親父がちよつとうざこのが問題だ」と言われても、泣きながら兄に抱きついていた。母はそのことを知らないのだろうか。

「ありがとう。紗衣がそう言つてくれると気持ちが楽になるな。でも、今はこれで良かつたと思つてゐる。お金がなかつたら、やつぱりあなた達にしんどい思いさせたかもしれない」

そこで、同時に鼻をかんでから、目を合わせて笑う。

お互に鼻は真つ赤、目も真つ赤、私に至つては、つけまづげもとれて恐ろしいことになつてゐるだけ。

「だからね、子供たちにお金がかからなくなったら、仕事を辞めて決めてから働きに出たの。それこそ十何年も前の話。今は貯蓄もかなりできたしね。変な話だけど、辞めるのを楽しみに頑張ってきたんだよ。お兄ちゃんさつさと一人暮らしはじめちゃったけど」

言いながらケラケラ笑う。

でも母は、兄が家を出る時だって何も言わなかつたはずだ。  
そういう人なのだ。この人は。

「まさか紗衣がそんな風に思つてるなんて、わからなかつたなあ。  
『めんね。そんな風に思わせて。紗衣のせいなんかじやないよ。だ  
けど聞いてくれて良かつた。ありがと』」

「う、ううう…。私も『めんね…お母さん。ありがと』…」

何年分の涙を今日使い果たしたのだろう。  
すでに目が半分も開かない。ちゃんと冷やしてから寝ないと、明日  
の朝は悲惨なことになりそうだ。  
自分の検討違いつぱりに、少し恥ずかしくなつたけど、やっぱりち  
ゃんと聞いてよかつた。

もともと母が働きに出たのは、言つなれば苦汁の決断だったということ。

私の自己満足を、母は重荷どころか、ただ素直に喜んでくれていた。  
いつも明るく楽しそうな両親にも大変な時があつたのだ。思いも  
よらない話、だけどそれも、私達を父を、母が大切に思うからこそ  
の出来事。

聞かなきや わからない。家族だつて、話さなければ、伝わらないことはたくさんあるのだ。

言わなくとも分かるだらう、は今日限り辞めようと私は思った。  
わざいな事でもちゃんと話そう。母もそれを望んでくれている。

テーブルの上に山積みにされた鼻水だらけのティッシュ。  
これは母と私の思い。  
私はまだまだ視野の狭い子供で、それを思い知った。それから、いつもでも私のことを大切に思ってくれている家族がいることを改めて認識する。

大丈夫。なにがあつても、この先どんなに悲しいことがあつたとしても、私には家族がついている。

今日のことを、ずっと忘れないでいようと思つた。

## No.14(前書き)

お気に入り登録というのが100件を超えたようです。  
たくさんの方に読んで頂けているみたいで、とても嬉しいです。ありがとうございます。

完結まで頑張りますのでよろしくお願ひします。

月曜日。

昨日はあれから母と夜中までいろいろな話をした。

今まで聞いたことのない話。具体的に言つと、父と母のなれそめが大部分で、後半完全にただののろけだったが、父のことを話す時の母の顔は40を超えても恋する乙女そのものだった。

出会ったふたりが気持ちを伝えあって、恋人になり、結婚して、家族になる。

それは今の私の理想そのものだった。

思わぬところで、腹を決めた自分へ追い風のよつな贅辞をもらえて、それが私の勇気になる。

今日、この気持ちを宥斗に伝える。

やっぱり卒業式の後にしようかな、と時々臆病な自分が顔を出すが、それまでに宥斗にもし「彼女」ができたらどうするんだ! と脳内で自分同士を存分に戦わせた。

結果、臆病な自分はきれいをつぱりぶちのめして、今日この口を向かえることになった。

もう逃げない。

「幼なじみ」は今日で卒業する。

白いマフラーを首にしつかりと巻きつける。

玄関に備えつけてある鏡の前に立てば、いつもと同じ自分がいた。

泣くか笑うか。

一世一代の大勝負。

ローファーのつま先を鳴らしてから、思い切りドアを開ける。

「いってきます！」

冬晴れの青い空の元、私は確固たる決意を持って、歩みを進めた。

門の外に出ると、宥斗はもうすでに待っていた。

「おはよう、宥斗」

「……おう」

首にはお揃いの黒いマフラーが巻かれている。

宥斗と恋人になりたいなら、必然的に親衛隊のみなさんとの戦いもきっと避けられない。

正々堂々、お揃いで登校してやるひじやないの……！

アドレナリンが分泌しそぎて、少々、いやだいぶテンションのおかしい自分はすっかり忘れていた。

日曜日の別れ際、黙りこんだまま顔を上げず、宥斗の様子がおかしかったことを。

言いたいことだけ言って、自分はわざと逃げ帰ってしまったことを。

もともと宥斗は寝起きが悪いため、朝は口数があまり多くない。機嫌が悪い、とまではいかないがボートとしていて、学校に着くまでそんな感じだ。

「してきたんだな、それ」

目線だけで私のマフラーを差せば、眩くよつこ宥斗が言う。

「うん……す」「こあつたかい…ありがとわね」

おかしなテンションそのままに、自分でもシッコみをいれたくなるほどしゃつきやしながら宥斗に言ひ。

あむと宥斗は顔半分をマフラーで隠して、黙りこんでしまった。

今日も眠いのかな、まあこいつものことだ、と特にその様子を気にせず、駅に着くと電車に乗り込む。

電車の中でも黙つたままの宥斗。ここまでだんまりの日は珍しいので、やすがに気になつてきて、いろいろ思い返してみると

それによつやく私は気付いた。

気付いたけど、気付いたらなおさらなんと言つて声を掛けついの  
かわからず、気まずい無言が続く。

つこさつきまでは、いつものことだ、と思つていたのに、意識した途端に気まずくなる。厄介なものだ。

電車から降り、学校の最寄り駅に着く。そこから徒歩10分ほどで、私達の学び舎が見えてくる。

駅から学校までは一本道で、そこは私達と同じ制服に身をつつんだ人々で溢れかえっている。

当然友達とも多くでくわし、その度に挨拶を返していく。

「おーっすー宥斗！」

「…いってえ」

後ろから思い切りタックルをして宥斗をふつ飛ばす勇者。

金髪に染められた髪に明るい笑顔。この学校のTHEお調子者称号

を欲しいままにしている彼は、宥斗と同じクラスの山科くん。  
この光景も毎朝のお約束だ。

だけど今日は氣まずい空気をぶち破ってくれたので、心の中で併んでおく。

アリガトウ、TATEお調子者くん。いつもちょっと繽々陶しいとか思つて「めんなれこ」。

「相変わらず朝は感じ悪いなー！あ、飯島さんも、おはよー！」

「おはよう、山科くん」

飯島さん、とは私のことだ。

についり微笑んでから挨拶を返すと、宥斗にものすこじで睨まれた。

「なに？」

さすがに何もしていないのに、そんな目で睨まれるのは心外だ。  
ちよつとムツとして返せば、宥斗は溜め息をついた。

「ん~…今日もかわいいね、飯島さん…こんな顔がいいだけの男  
はやめて、俺にしない！？」

そんな私達の空気を微塵も気にせず、山科くんは言つ。

このへんが、彼のお調子者度合いを表しているであら。

毎度のことなので曖昧に笑つて流しておく。

ちなみに宥斗と私が恋仲でないことはみんなが知つているのに、彼だけはしつこくそのこと指摘する。

「ん~！？」

宥斗の真後ろからぐるっと回つこんで私達の前にやつてきて、体を向き合わせる状態になり、何かをじいと見てくる。なに、やつてるんだろう。

意図がわからずきょとんとしていると、出来れば今日私が触れてほしくなかつた部分に、盛大に割つて入つてくる。

「あれ～！？あれあれ！？君達のマフラーもしかしてお揃いつ！？」

右手に宥斗のマフラー、左手に私のマフラーを持つて、やたら大きなアクションで叫ぶ。

「や、山科くんつーー！」

私は慌ててマフラーを引っ張るが、お調子者は手を離さない。登校中の生徒達の注目をいつせいに集めてしまつた。あ～勘弁してよ～。

「な～に～ー？とうとうやつこいつ仲になつちやつたわけ！？この俺を差し置いて……やるな～……」のムツッシリスケベーー！」

お調子者が宥斗の肩をドツく。

私の隣から、見たくもないほど怒つたオーラが漂つてくる。寒いー！～右半分が激しく寒いーー！～

極力そちらに目を向けないよう歩くが、お調子者はこつまでたつてもマフラーを引っ張つてゐるため、私と宥斗はまるでワードのついた犬のようになつっていた。

「バカが。離せ」

地を這いつぶうな低い声の宥斗。

怒りますね！？

機嫌の悪い分当社比5割増で怒りますよね！？  
うへ出来れば流れ弾は喰らいたくないつ！！

我が身かわいさに保身に走れども、当の本人であるお調子者は、宥斗が本気で怒っていることに気が付いているのいないのかニヤニヤしている。

宥斗が思い切り手を振り払つと、やつと私も解放される。

「おへ怖っ！やへつとくついたと思ったのに、その様子じや違つ  
みたいだねえ」

明るい笑顔は変わらない。

これだけ怒れる宥斗を前にして、まだお調子者を崩さない彼は一体何者なのか。あ、お調子者か、とうまい具合にひとりノリツッ込みを決める。どうしよう。ちょっと面白い。

思わず頬がニヤけるの止められない。

ひとりツッコミが決まってニヤけるのアドレナリンのせいだ。今日の私はやっぱりおかしい。

「…なに笑つてんだよ」

脳内で結論づけている私に、怖い顔のまま宥斗が言つ。

「へ？な、なんでもないよ？」

まさかひとりしき「ミリ」でウケていたとは言えず、無難に言葉を返す。やはり流れ弾はこいつらにも飛んできたようだ。宥斗はそのまま私をじっと見つめる。

怖い。

怖いよ、宥斗くん。

脳内でなんとか言葉を振り絞ると、事もあらうかお調子者は「じゃあ後は若いおふたりでー！」と、両手をポケットにつっこみ、スキップのような動きをしながら華麗に去つて行つてしまつた。

えええッ！？この空氣のまま置いてくう！？怒らせたのはあなたなのになー？

最早脳内でお調子者は「あんた」呼ばわり。だけどそれで充分だろう。拌んだ私の心を返せ、と少々いじ汚いことを思いながら周りを見渡せば、嵐はすでに過ぎ去った後。あひらうひらうで、生徒たち（主に女の子）が私と宥斗を見てヒソヒソと声をたてていた。明らかにお揃いのマフラーを指している子もいたりして、私は去つて行つたお調子者を屋上から紐で逆さまに吊したくなつた。

この5分10分の出来事が、今日が終わるまでには学校中に知れ渡つてゐるのだろう。女の子のネットワークほど怖いものはない。そして、それだけ宥斗はこの学校では人気なのだ。  
ただの「幼なじみ」が、槍玉にあげられるほどに。

「…紗衣」

「はいっ！！」

思わず背筋を伸ばしてなんとも正しい返事をしてしまつ。

「俺、今日放課後委員会だから」

「ん？ああ。アルバム委員ね」

卒業アルバム制作委員会。

推薦すでに大学が決まっている人ばかりが選出されるその委員会は、その名の通り、卒業アルバムを作る委員会のことである。クラスページをどうするかとか、アンケートを作つて配布して、集計して。まあ言つなれば非常にめんどくさい委員会だ。

宥斗のクラスは比較的推薦の人が多くて、くじ引きで委員を決めたらしい。1クラスにつき2人選出されるが、運の悪いことにそのくじ引きで大当たりをしてしまつたと嘆いていた。もう一人も確か男子だと聞いている。

先週その話を聞いた時、「男一人でアルバム委員じゃ大変だね」と

言つたら、「去年の卒業アルバムのクラスページ丸写しするから大丈夫」と、恐ろしいことを言つていた。

それも男一人だからなせる裏技なのだろうか。

ちなみに私は、委員ではない。クラスにそういうのが好きな子達がいて、自ら立候補してくれたらしい。私からしたらめんどくさいことを好きだと言つて引き受けた彼女達は、尊敬に値する。

「じゃあ今日は先に帰つてるね」

至極当然のことと云つてから、昨日こつよつ…と今日伝えると決めたはいいが、今日のいつ言つかを全く決めていなかつた自分の計画の甘さと、がっかりする。

「…今日は最初の集まりだから、すぐ終わるらしいんだけど

怖い顔はどこかに消えて、わざと目線を合わせずに宥斗が言つ。昨日のよう、「あからさまではないが、少し恥ずかしそうだ。

待つてろ、つてことね。

「やつか。それなら待つてよつかな」

クスクス笑いながら云つと、おでこを小突かれた。痛い。

「笑つてんじやねえ。紗衣のくせに」

「ひとりで帰るの寂しいの? もちやん

「アホか! … ゆづけやんはやめろ!」

わざと昔の愛称で呼べば、宥斗はおもじりこゑたびに反応を返す。機嫌はいつの間にか直ったようだ。全くいつもでも子供で困る。昨日思い知った自分の子供っぷりを棚にあげて、私も宥斗のことを言えたものでないが、気まずさのなくなった会話はやはり楽しい。

「幼なじみ」としてかわす会話には、もうカウントダウンがかかっている。

伝えてしまえば、もう元には戻れない。

多分、いつもの私なら、昨日の映画館での出来事や繫がれた手のことと思い出しては、宥斗の顔を見るたびに、自分の顔を（多分）真っ黒にさせていたに違いない。

腹を決めたおかげなのか。

宥斗の顔を見ても、いつものように接することができる。

門をくぐり、昇降口まで来ると、「帰り、ビリで待ってる?」と宥斗が聞くので、「すぐに終わるなら自分の教室にいるよ」と答えた。毎朝宥斗と一緒にるのはここまで。下駄箱が反対方向にあるので、これから先は各自教室に向かう。

「じゃあまた帰りにね」と言つて歩き始めた私の手を宥斗が引つ張る。

進行方向と反対に思い切り引っ張られた私は、バランスを保てなくて、宥斗の胸のあたりに後頭部を激突させた。すると私の左耳に、宥斗の囁き声が降つてくる。

「帰りはおでて繋いで帰らうね。わっちゃん

ボボンッ……！

顔面から盛大な爆発音をさせて、全身茹でダコのように赤くなっているであろう私に、満足そうに笑つてから、宥斗は自分の下駄箱に歩いて行つた。

残された私はやはり下駄箱にいたたくさんの方からものすごい視線を頂いた。

ここ最近の頂いた視線、もし売つて金になるなら相当な金額になるんじゃないだろうか。

… と/orか！…………！

あれはさつきの仕返しのつもりなの？！

私のささやかな意地悪の100倍は威力があるぞ…！

妙な色氣垂れ流しやがって！！！！

そして耳元で囁くのはやめて頂たい！！！！

昨日に引き続き私が耳が弱いと知つての所業か…！

みんな見てる中で何考えてんの…？わざとなの一？やっぱりわざとなの一…？

まだまだツッコみ足りなかつたが、あまりにも見られているこの状況に耐えられなくなつて、小走りで下駄箱に向かつて、上履きに履き替える。

「お詫びして訂正させて頂きたい。」

いくら腹を決めたと言えど、不意打ちフエロモンボイスには、私の顔面爆破は回避できないようです。

階段を登り、自分のクラスの教室を目指す。

私は1組で宿斗が7組。

見事に一番離れたふたつのクラスは同じ棟ではあるが階が違う。1組は2階。7組は3階だ。

2階に到着して、長い廊下を歩いていると、ものすごい形相でこちらを見ている数人の女の子が目に入る。

：宿斗親衛隊のみなさんだ。

視線で人を殺せる世界なら、私はとうくん死んでいる。  
憎くてたまらない、というのを少しも隠さない様子に大放出中のアドレナリンが急激に減っていくを感じた。

いや、頼む！！頑張ってくれアドレナリン！…ビビるな…！

脳内ツッコミをする」とこで気を紛らわしたが、視線は私が教室の中に入るまで追つてきた。

きつと見ていたのだろう。

つい先ほどの出来事だが、2階の廊下の窓からは昇降口が丸見えだし、階の違う宿斗は知らないだろうけど、親衛隊のみなさんはたいてい毎朝この場所で井戸端会議をされている。

お調子者が大勢の生徒の前でお揃いのマフラーを大袈裟に暴露したこと、もう伝わっているのだろうか。

だからこそ、あの様子では近づかなければ必ず何か起るだろ。

だけど何も恐れることはない。

私は宥斗のことが好きだけ。

彼女達と、なんの変わりがあるといつか。

直接対峙しなければならない状態になつたら、はつきり言えばいいのだ。

今までみたいに、同じレベルになりたくない、なんてかつこつけじる場合じゃない。レベルなんて、いくらでも上げてやるじゃないか。

もつ無視なんかしてやらな。

もともと言われっぱなしゃられっぱなしあ合はないんだ。もつ

べつせ卒業だし、いつなつたらとこ戦つ――――――！

教室に入った途端に再び湧き上がる都合のアドレナリンを不安に思いつつ、自分の席に座る。

朝から疲れた。授業が始まるまで一休みしよう、と机につづふす。朝のホームルームが終わり、授業開始まで後少しこいつその時。

私の耳に聞き慣れた声が飛び込んでくる。

「紗～衣～――――――！」

「みのり。おはよ。1時間め間に合つたね

「やあんなことじつでもいいの――。」

「なに? じつしたの?」

「紗衣、今朝有斗くんと、お揃いのマフラー巻いて手繫いで登校したうえに、昇降口で別れ際にキスしたって本当！？」

「はあ！？！？！？！」

私は天を仰ぐ。もう、本当に。

頼むから勘弁してください……

興奮するみのりに、「ありえない。そんなことしてないから」と云ふ  
えたところで、始業の鐘が鳴る。

「後で詳しく聞かせてね！」「と、みのりは自分の席についた。

先生が教室に入ってきて、授業が始まる。1時間めは古典だ。とり  
あえず教科書とノートは開いていたが、申し訳ないほどに先生の声  
は頭に入つて来ない。

登校して、教室に着いてから、たかだか20分。その間に、なんでも  
「お揃いのマフラーをして、手を繋ぎ、昇降口でキスをした」とい  
う話にまで広がっているのか。

合つてゐるのはお揃いのマフラーの部分だけ。正解率が低すぎた。

もう我慢ならない。努めて冷静に分析してみようと心掛けたが、今  
日の私は何度も言つようになドレナリン大放出状態。  
加えてもともと冷静に分析、とか言つタイプではない。  
盛大に爆発させて頂こう。脳内で。

ふつつわけんなあああ………

噂に尾ヒレ羽ヒレくらこは許されると思ひナビ、背ヒレに胸ヒレま  
でついてるじやないの………

なんなら尻尾も加えてやるわ………

登校してから20分だよ！？いい！？20分！？

お調子者がマフラーのこと一斉に広めやがつたと思つたら、今度は  
キスですと！？！？！？

ファーストキスもまだな私にこの噂はいじめに値しない！？実際見

てた人はそんなんしてないの分かるでしょうがああ…………ふざけんなあああ！！！！！！

ものすごい怒りに支配された私は、最後の一文でノートのページを思わず破り潰してしまった。

隣の席の男の子が怯えたようにこちらを見つめているけど、気にしない。彼には悪いがそれどうじやない。

ある程度噂になるであろう事は予想していた。お揃いのマフラーで登校する、ということは、宿斗に気持ちを伝えると腹を決めた私の決意の証でもあった。

きれいさっぱりなくなつたはずの弱い自分が、また表れても打ち勝てるよつこ。

その噂が今日中に学校中で広がるであろうことも予想していた。ところが蓋を開けてみれば、この有り様。

今日中どこか授業始まる前に広がつたわ！…………

後から後から怒りが湧いてくる。何にそんなに怒つているのが自分でもよくわからなかつたが、とにかくにも腹立たしい。

怒つていろいろうちに、いつの間にか1時間めの授業は終わってしまった。手元には、真っ白なノートと、グツチャグチャに破かれた哀れなページの残骸。

そのまま後の休み時間に、みのりは私の席に飛んできた。しかし、みのりは今週週番で、今日休んでいる相方週番くんの分も、先生に細かな用事を次から次へ頼まれまる。

4時間になると、みのりの眉間に紙でも挟めるんじゃないかと思うほど、シワが寄せられていて、全身から遠慮なく不機嫌オーラを放っていた。

その様子を見て思わず吹き出せば、怒りの気持ちがスースと半減した。

みのりのことだ。私の話を聞きたいのに邪魔されることもそうだろうけど、噂が嘘だと分かった以上、とんでもない嘘っぱちが学校中に広まり、私がまたえされることを分かつていて、犯人探しにでも行きたくてうずうずしているに違いない。

私に起きた出来事を、いつも自分のことのように喜んだり、怒ったりしてくれるみのり。

最初に嫌がらせをうけた時も、私も知らないうちに犯人を見つけあげて、リーダー格の子に怒鳴りこみに行つた。

ぶん殴りつとしているみのりを止めたのは、彼女の被害者であるはずの私だ。

もちろん彼女のことを庇つたわけではなくて、こんなことでみのりが停学にでもなつたら、それこそ彼女達の思うツボだと思ったが故の行動である。

とりあえず、この授業が終われば昼休み。一度私の所に来てから、犯人探しに向かうであろう親友をまずは体当たりしてでも止めなければ。

今回もきっと私以上に、怒つてくれているんだろう。  
感謝せずにはいられない。

残っていた半分の怒りもきれいに消え去って、残ったのは、猛突直進型の親友に贈る感謝の念だけだった。

「紗衣……お毎行くよ……」

「今日なぜこなすの？」

「視聴覚室ー」

私の手を掴むと、みのりは教室のドアに向かって歩き出す。慌ててお弁当を掴んでから、後に続く。

途中、いつも一緒にお昼を食べている他の友達から、「紗衣とみのり～今日は一緒しないの～！？」と質問を投げかけられたが、みのりは止まる気配がなく、「今日は視聴覚室で食べるね！」と、私は引きずられながら言葉を返した。

みのり以外のクラスの女の子達も、噂のことほきつと聞いてるはずなのに、誰も、何も聞かないで普通に接してくれた。ありがたい。

怒るみのりを見て、尊は嘘だということをきっとわかったのだろう。本当に、本当に、宥斗親衛隊のみなさんと同じクラスにならなくて良かった。毎日生きた心地がしなかつたと思つ。

視聴覚室に着くとすぐ、予想通りにみのりは声を上げた。

「あの尊、ビームまでが本当のひとなのっ！？」

大きな瞳が怒りで満ちている。みのりは、その性格とは裏腹に、外見はまるで小動物かのようにかわいらしこ。

私よりもだいぶ低い身長に、丸丸の大きな瞳。四角くて大きめの前歯。アニメの声優さんのようなかわいい声、甘いしゃべり方。髪型はコロコロ変わるけど、今は前下がりのボブにしている。ちなみにギャルっぽいメイクを好んでしていて、瞬きをする度に重ね付けされたつけまつげがバサバサ揺れる。

外見だけみれば、本当にかわいらしくて、すっぴんだとアイドルのような女の子なのだ。外見だけみれば、の話だが。

何せ艶んだピアスの傷を放置するような子なのだ。面倒くさがりでガサツ。その上短気で喧嘩つぱやい。

だけどとても情に厚くて、実は涙もろくて、一度仲間と認めた人はことごん優しい。それ以外には恐ろしいほど容赦がないけど。

「えーと、お揃いのマフラー、までかな」

視聴覚室の机は横に長く、4人並んで座れるようになっている。私は教室のちょうど真ん中の机に歩いて行き、椅子に腰を降ろす。

「それだけえ！？」

みのりも私の隣に座り、持っていたお弁当を机に置く。私達はお弁当派で、学食にお世話になつたことはほとんどない。

「やあーっとくついたかと思ったのに！紗衣がそんな大胆なことするとは思えなかつたけど、まああの男ならやりかねないし。あーーーそんなのはどうおーでも良くて、何がどうしたらあんな噂が広まるのぉー？」

みのりは私の顔を覗き込むと、怒りのオーラを継続させながら叫ぶ。

あの男、とは宥斗のことだわ。噂通りのことを、やりかねないと  
思つてゐるのか。

それこそやめてくれ。恐ろしい。

「いやーそれ私も聞きたいよねえ」

前半は無視して、後半の質問のみに答える。ヘラシと笑いながらお弁当を広げて、「いただきます」のポーズを取りながら私は言った。

「ああ～え～！！！！！ちよつとは怒りなよーー何へラへラしてるのでーー！」

キッと睨みつけられるけど、持っていた箸で自分のお弁当箱から卵焼きを素早く掴み、みのりの口にいれてやれば一時的に顔がほんわか笑顔に変わる。

「紗衣ママの卵焼き相変わらずおいしつー！」

「わう？ よかつた」

みのりは私の母の料理が大好きで、それは彼女の弱点でもある。どんなに怒つても母の料理を食べると一時的に笑顔になる。

また怒った顔に戻る前に、私は今日までのことを説明した。

日曜日に宥斗と映画に行つたこと、マフラーがお揃いなわけ、今朝の登校時の出来事、昇降口での宥斗のイジワル。

色々話しづらアレコレは割合したが、それ以外は全部話した。  
もちろん、宥斗への告白を決心したこと。

みのりは最後まで口を挟むことなく、相づちを打ちながら聞いてくれた。

「…と、いうことで、犯人探しなんてしなくていいからね」

「ええ！？ なんでわかったのつー？」

びっくりして、丸い目をさらにまん丸にさせたみのりに笑いながら返す。やはり、これも予想通りだ。

「大丈夫だよ、私は。みのりが私以上に怒ってくれたから、もう気が済んじやった」

「でもお～…」

まだ納得のいかない様子のみのりに、私は話している間も食べ続けている、口いっぱいの母特製おにぎりを飲み込んでから言葉を続ける。

「昇降口にいた人みんな見てたんだよ？ 誰が言い出したかなんてわからないって」

「まあ、そうか…」

「でもね、みのりの気持ち、嬉しい。ありがと」

微笑んで感謝の意を述べれば、みのりはしぶしぶといった感じで頷く。

「うん、うん、うんだね

「う。『幼なじみ』は、もう終わっちゃう」

「やつ…」

「うん」

みのりは自分のお弁当に全然手をつけていない。食べながら話していた私はもう食べ終わっちゃうだとこうの。」

「振られたらなぐをめてよね」

最後の卵焼きを口に放り込みながら、あまり深刻にならないように心掛けて言った。

「大丈夫だよ」

即答でみのりが答えを返すと、そのまま言葉を続ける。

「ちょっとした、おまじないもしてあるし」

「おまじない?」

お弁当を食べ終わり、食後のお茶を飲んでいた私は怪訝な言葉を問い合わせる。「おまじない、って一体何したんだろ?」

「やあ。でも元々必要のないおまじないだけどねえ。でもあの男がいつもやく態度で示しだしたみたいだし、かなり効いてると見た」

言つてる意味をさっぱりわからない私はその後何回も、「おまじない」について聞いてみたけど、結局みのりは教えてくれなかつた。

「紗衣

「ん?」

「頑張つてね

「…ん。ありがと」

そのあとすぐに、チャイムが鳴り響いて、昼休みは終わった。みのりはほとんどお弁当を食べていなかつたので、「お昼も食べていいのに5時間めの体育なんてできる気がしない」と、ひとり保健室に向かつた。

私のせいでお昼食べられなくて」「めん」と謝ると、「単に昼寝の口実」と、笑つてくれた。

放課後が近づいてくる。

今日は宥斗が委員会で、その後教室に迎えにくる。

学校だといつ人が来るかわからない。今日大層な噂が広まつてしまつた以上、これ以上の話題提供はもう十分だつた。

一緒に帰つて、夕飯を作る前に宥斗の家に行こう。

そしてそこで、告白をしよう。

やつと立つた告白の計画。

大丈夫。行動的にはいつもと全然違つことをするわけじゃない。

宥斗の家に行く時間が早まるだけ。

何も怖くない。大丈夫だ。

具体的になつてきた計画に緊張してきた私は、必死で自分をなだめる。

そして静かな高揚感と共に、いよいよ放課後を向かえた。

「紗衣、バイバーイ」

「バイバイ」

帰りのホームルームも終わり、みんなそれぞれ教室を出て行く。

帰宅する人もいれば、図書室で勉強をしていく人もいる。推薦で合格が決まっている人の中には、部活に顔をだしている者もあるようだ。

机に座つたままの私は次から次に声を掛けられて、そのひとつひとつに手を振りながら返事をしていく。

「紗衣！まだ帰らないの？」

振り向けば、すっかり帰り支度を整えたみのりが自分の席からこちらに向かいながら言った。

「今日、宥斗が委員会なんだ。すぐ終わるらしいから待つてよ」と思つて

「へえ～谷口卒アル委員なんだあ」

「へじで当たっちゃったんだって

谷口は、宥斗の名字。

この学校ではアイドルと化しているのが原因なのか、宥斗を呼び捨

てにする人は、私以外の女の子ではみのりしかいない。いや、もしかしたら他にもいるのかもしれないけど、私の知る範囲ではみのりしかいなかつた。

「じゃああたしも一緒に待つてるよお」

そう言いながら、みのりは私の席の前の席に座り、バックを肩から降ろす。

「大丈夫だよ。すぐ終わるって言つてたし。矢口くんと一緒に帰るんでしょ？」

「紗衣の方が優先だもん。啓太も一緒に話して待つてねばあっとゆう間だよお」

「でも……」

「みつのりーー！」

噂をすれば、みのりの彼氏である矢口啓太くんが、いつものようにみのりを迎えてきた。その後ろにはなぜか宥斗もいる。彼らは同じクラスで仲がいい。しかし、私と宥斗は帰りも昇降口で待ち合わせているので、一緒に迎えに来ることはまずない。しかも今日宥斗は委員会のはずだ。

「啓太あ。紗衣、谷口が委員会終わるまで待つてるんだって。一緒に待つてたいんだけどいい？」

一足早く、みのりが矢口くんに声を掛ける。

「全然いいよ！紗衣ちゃん、俺も一緒にいいかな～？」

ニコニコ笑いながら、矢口くんが言つ。矢口くんは本当に温厚な性格で、またその性格が顔に表れている。そしてその優しい笑顔に私は毎日こいつそり癒されている。

「そんな話になつてゐるのか」

後から教室に入つてきた宥斗が言つ。なにそのうんざり顔。

「あ～ら宥斗様。紗衣を待たせるなんていい」身分ねえ

みのりがわざとらしく、宥斗がその呼び方を嫌がつてゐるのを分かつていて言つ。「宥斗様」は、親衛隊のみなさんの中での、宥斗のあだ名だ。一部面白がつてゐる人もいるようだが、本気でそう呼んでいる人もいるらしい。恐ろしい話だ。

「うるせえ」

宥斗が吐き捨てるよつこ言つと、みのりを睨みつける。もちろんみのりもそれを受けてたつたようだ、ふたりの間にバチバチと火花が散る。

このふたりはいつもこんな感じで、なぜかよくわからないが仲が悪い。

「宥斗ー俺のみのりを睨むのはやめてくれるー

「お前のだつて言つなら、」のうなご女をどうとかしてくれ

「向よーへタレのくせにー。」

なぜこんなにもよつちや触ひや喧嘩になるのだろつか。まあよほど相性が悪いんだろづ。今日も喧嘩が激化しないうちに止めなれば、と私は口を開いた。

「まあまあ。宥斗はどうしたの？ 委員会は？」

「…今から行く。すぐ終わるからさび、もし遅引いたら先に帰つていいからな」

それを言つたためにわざわざ来ててくれたのか。私が「いいよ。待つてるから」と云えれば、宥斗は嬉しそうに微笑んだ。

「じゃあもし遅くなつたらい、図書室にでもこいで。ここ寒いだろ」

「あ、そうだね。もうストーブ消えちゃつたし」

うちの高校の暖房器具は、昔ながらの石油ストーブだ。銀色のパイプが天井まで伸びていて、つける時はマッチを使わなければならぬ。帰りのホームルームのあと、担任がストーブを消してから教室を出て行く。この寒い教室で長い時間待つのは確かに辛いかもしれない。図書室なら閉館までストーブが焚かれているし、宥斗の提案は最もだつた。

「あ～やだやあだ～。見てらんなあ～」

「みのりつーそんなこと言つたりやダメだよー。宥斗の貴重なデレシーなんだから」

「

「せうこひことだからお前らは帰れば」

…何がそういうことなんだね？ セウそく話をまとめにかかっている宥斗に、みのりが食つてかかる。

「あんたにそんなこと指図される覚えはない！ あたしが！ 紗衣と待つてるって決めたんだから！」

「はいはいみのりちゃん落ち着いて。宥斗が怒っちゃうから今日は帰るよ～」

「はい立つて」、と矢口くんがみのりを無理やり立たせる。そのまま抱っこされたみたいに拘束されたみのりはギャー、ギャー喚きながら教室を後にする。

矢口くんはみのりを抱えたまま、教室を出る前に、「宥斗、紗衣ちゃんまた明日ね」と実に爽やかに笑つて帰つて行つた。

その様子を私が呆然と見ていると、「じゃあ俺も行くから」と、宥斗も教室を出て行く。

突然ひとりになつた私は、キヨロキヨロ周りを見渡すと、教室内に残つているのもやはり私ひとりで、なんだかも寂しい気分になつた。

時計を見れば3時半。

そのまま椅子から立ち上がり、窓際まで足を進めてから下を見下ろす。

校庭には、すでに活動を始めた運動部がしひめきあつてゐる。サツ

カー部、野球部、ソフトボール部…。そして校庭の脇に植えられている木の下には、落ち葉を片付ける公務さん。彼は相変わらず働き者だ。

もう少し視界を外に向ければ、お母さんと仲良く手をつないで校庭の外を通り過ぎる幼稚園児達が見えた。この時間は、ちょうどお迎えの時間らしい。みんな楽しそうに笑い合っていて、見ていろっちまで笑顔になる。

この慣れ親しんだ景色とも、もつすぐお別れ。思う存分に景色を堪能しているところに、怖いくらいに殺氣だつた声が掛けられる。

「飯島さん」

ゆっくりと声のする方に顔を向ければ、予想通りの人物が立っていた。

やっぱり来たか。

来ることはわかっていた。彼女は宥斗と同じクラスだし、宥斗がアルバム制作委員だということももちろん知っているだろ？。そして、今日は委員会があることも。

きっと宥斗のいない時間を狙つて來たに違いない。

こうなることはだいたいわかっていて、私は今日教室で宥斗を待つこととした。もちろん寒くなつたら図書室に移動しようとは思つていたけど、そのまえに彼女が表れることは、私の中ではほぼ確信に近かつた。

そうして今、それが確信になる。

「…何か用？相沢さん」

ここまで読んで頂いてありがとうございます。  
いよいよ対決です。

予想以上に長い話になってしましましたが、最後まで、紗衣と宥斗  
を見守つて頂けると嬉しいです。よろしくお願ひします。

そしてみなさま、メリークリスマス!  
素敵なクリスマスをお過ごしください!

相沢多香子、それが彼女の名前。宥斗親衛隊のリーダーであり、私の幼稚な嫌がらせを働いた張本人。みのりに怒鳴りこまれたのも、怒った宥斗に一喝されたのも、彼女だ。

「ちょっと話があるの。いい？」

「どうぞ」

教室後方のドア近くに立っていた彼女は、私の返事を聞くと、私の真正面になるように場所を選び、ちょうど教室の真ん中あたりまでゆっくりと歩いてきた。一度立ち止まると、再度歩みを進めて、そのまま私の前に立つ。

目の前の彼女のその表情は、出来ればお目にかかりたくないものだった。

「お前が憎くて憎くてたまらない」

そう、目が物語っている。眉根を限界まで寄せ、上目づかいで私を睨みつける。両の手は下げられていたが、拳を握ったその手には明らかに力が込められていた。

「……どうこうつもり？」

その表情のまま、微動だにもせず相沢さんが口を開く。あつと怒りに脳内を支配されているのだろう。その声は震えていた。

「なんのこと？」

私は毅然とした態度で対する。私は何も悪いことなどしていない。  
私の脳内に放出されたアドレナリンは、間違いなく今日最高数値を叩き出していた。

「……つー！ 谷口くんのこと」に決まってるじゃない！ 同じマフラーなんて巻いて登校してきて、どういつつもり！？」

私は、彼女たちに何を言われても、「無視」という名の防衛壁を押し通してきた。そんな私が、毅然と言い放ったことがよほどお気に召さなかつたようだ。

怒鳴る、というよりも悲鳴に近かつた。

「お揃い」という言葉は使わなのが彼女らしい。

「それを、私が相沢さんに話す筋合いか、ゼリにあるの？」

「私は谷口くんのことが好きなの……知る権利がある……」

どんな理屈だよ、アホか。

思わず脳内でツッこんでしまつた。嫌がらせも幼稚だつたけど、彼女の頭も十分幼稚なようだ。当たり前か。その頭があの嫌がらせを生み出したんだから。

「それこそ私にも宥斗にも関係のない話みたいだけど」

「偉そりて言わないでよ……あんたなんかただの幼なじみのくせに……！」

「ただの幼なじみのくせに」。前ほこの言葉に多少傷付いていた。そう言われたら何も言い返せなかつた。もとより返すつもりもなかつたけど。

でも今は違う。私はもう決めている。「幼なじみ」は今日限りで卒業する。

「だからっ。」

そう返せば、相沢さんは困惑の色をその顔に浮かべた。

彼女の中での台詞は、私にダメージを一番与えられるものだと思つていいのだわ。まあ間違つてはいなきど。

「ただの幼なじみが同じマフラーして、何がそんなに氣に入らないの? 私達が付き合つことにでもなれば、あなたは満足?」

挑発するよといひました。もちろんわざとだ。刹那、相沢さんの顔は真っ赤に染まり、目にまづすら涙を浮かべ始めた。

「そんなの絶対に許さない!……」

金切り声が私の鼓膜を刺激する。彼女は勝手だ。いつだって勝手だ。それがいつまでも通ると思うな。

「相沢さんに、その権利はあるの? あなたと対戦は恋人でもなんでもない。そんな制限が、本当にできると思つてる?」

「パアアン!……！」

私たち以外誰もいない教室内に乾いた音が響き渡る。叩かれたのだ。それも思い切り。

荒い息遣いのせいで、彼女の肩は上下に揺れていた。言葉で勝てなければ暴力か。いつそ滑稽だ。お約束すぎる。

「…満足した？」

妙に冷静な気持ちだつた。こんなことくらいで気が済むなら、いくらでもすればいい。

それでも私が宥斗を想ひ気持ちは、変わらない。変えられないのだ。

「ううう……うーー」

相沢さんは下を向き、その瞳から、涙を滝のように流し始めた。文字通り滝のように頬をつたい、流れしていく。

とうとう泣いてしまつた。誰かを泣かせたのは人生で初めてだつた。泣かせた、といつよりは勝手に泣いたような気がするが

「あんた…なんかに…ツ、」

何か言おうとしているが、嗚咽がまじって聞き取れなかつた。

落ち着いてからしゃべればいいのに、と大分冷たい感想を持つ。彼女が泣いているのを見ても、私の心は痛まなかつた。そこまでお人好しじやない。

嫌がらせを受けたのは期間にして約半年。こちらが黙つているのをいいことに、どんどんエスカレートしていった。まあ、だからこそ、みのりと宥斗にバレてしまつたのだが。詰めが甘いとしか言いようがない。

無視を決め込んでいたけど、私だってそれで傷つかないほど鉄壁の心は持つていない。何度もひとりで泣いたし、学校に行くのが億劫になつたこともある。

それを全部、他の親衛隊の子達に指示し、率先してやつていたのが

彼女だ。

ふざけるな。泣きたいのはいつかだ。

「あんたなんかに……っ、わたしの、気持ちなんて……っ…………」

泣きながら叫ぶ姿は、まるでなにかに取り憑かれているようだった。  
そのままの状態で叫び続ける。

「こいつも澄ました顔して……っ、谷口くんの隣にいるのが当然のよ  
うな顔して！ 彼女でもないのに、谷口くんの笑顔を独り占めして…  
ッ、うつ……隣に、住んでるってだけで……どうしてあんたなの！…  
？わたしの方が谷口くんのこと、ずっとずっと好きなのに……！

！」

「…………っ」

言葉に詰まってしまった。

そんな私のことなんか全く気づいていないのだ。私は涙でべし  
やぐしゃになつた顔で見つめて、何かに耐えるようになりつつ。

「あんたにはわからないでしょうね。姿を見れるだけで嬉しい気持ち……おはようって声を掛けて、返事が返ってきた時の飛び跳ねるよ  
うな気持ち。毎日登下校を一緒にして、当たり前のようだ。谷口くん  
の家に入り浸つてゐるあんたには、絶対にわからない…………」

「…………。」

完全に言い返せなくなつた。

確かに私にとって、宥斗が隣にいることは、当たり前のことなのだ。  
産まれた時からずっと一緒に、離れていた時間などない。話しかけ

れば返事が返ってくるのだけれど、当然のこと。笑顔を見ると嬉しくなる気持ちはあるが、きっと彼女のそれとは違う。些細なことでも気持ちを動かす彼女の「好き」の方が私の持っているものよりも大きいのだろうか。

「本当にやめてよ……谷口くんの傍に、我が物顔で立たないで……っ……ではないとわたし、あなたに何をするかわからない……！」

もし、そうとしても……

「それでも、私だって宥斗のことが好きなの。何をされても、自分から宥斗の傍を離れることなんてできない」

私のその言葉を聞くと、相沢さんは驚いたように目を見開いた。そのまま手でぐしゃぐしゃの顔を拭うと、下唇を噛み締めて黙つた。無言の時間が続く。  
どれくらいそうしていただろうか。彼女はひとつため息をもらすと、入ってきた時と同じようにゆっくりとした動作で、私の前から姿を消した。

廊下を歩く足音も遠ざかり聞こえなくなると、膝がカクンと音をたて、そのまま床に崩れ落ちる。

……疲れた。憎しみを真っ向から受け取るのは、やつぱりしんどい。そうしたまいると、先ほどの相沢さんの言葉が脳内を駆け巡る。「隣に住んでるだけ」。その通りだ。私は運良く、産まれた時から隣に住んでいるだけなのだ。

相沢さんの気持ちは、きっと私には分からぬ。

ただ、もしこれが逆の立場だったら、と思うだけで背筋が寒くなる。

そうなつたら私は、宥斗の姿を見かけるだけで喜んだり、宥斗に挨拶を返されたことを飛び跳ねて嬉しがつたりするのだろうか。彼女と同じように、田障りな幼なじみを憎く思うのだろうか。

そんなことにはならない、なんて保障はもちろんビビにもない。

ずっと、なぜここまで敵意をもたれるのかなんて、知りたともなかつた。そんな理由を理解したところで、今までされて来たことは消えるわけじゃないし、ましてやそれを肯定することなんてできない。だけど、卒業を間近に控えて、よくやく彼女の気持ちを少しだけ知つて、もちろん、理解はしていないけれど思うところぐらにはある。彼女も私と同じように、恐れていたのだ。宥斗に、大切な誰かができてしまうのを。

そしていつも宥斗と一緒にいる田障りな私を、彼女は一番危険視していたのだろう。敬遠のつもりで始めたことが、エスカレートし、結局宥斗にも嫌われてしまつたわけだ。そりや原因である私は憎くて憎くてたまらないはずだ。

「なるほど……納得……。」

つい声に出して呟けば、ひつぱたかれた左頬が今更ジンジンと痛みはじめた。そつとそこに触れてみると、とんでもない激痛が走る。腫れているし、熱も持つている。

早く冷やさないと顔の形変わっちゃうかも、と思つても、今すぐもういいから立ち上がる元気は私にはなかつた。

私には分からぬ、相沢さんの宥斗への想いは、確かに私の心に響いた。それは嘘じやない。

だけど、それでも私は宥斗を好きだと、強く思つた。彼女の気持ちを知つたとしても、簡単に引き下がつてなどやれない。

皮肉なもので、宥斗に想いを伝えようとした気持ちはよつと一層強くなつた。

しかし、何せ疲れてしまつた。

教室内はすっかり冷え込んでいて、床に直接座つてお尻が冷たい。頬を冷やす氷を保健室にもらいに行かなきやならないし、そのあとは図書室に移動しなければ。もう少し休んでからいろいろ動こう。

そつ思つて目を閉じた瞬間

「紗衣！――！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3881z/>

---

「幼なじみ」

2011年12月25日18時49分発行